

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.95
2007

2
月号

トピックス

第6回大阪大学フォーラムをサンディエゴで開催 JICA(国際協力機構)と連携協力協定を締結

クローズアップ

新しい文理融合型教育プログラムの開発を目指して
—金融・保険教育研究センター—

ナウススペシャル

「中之島にコミュニティカフェを!」
—新しい社会学連携の形—



大阪大学広報誌

目次

トピックス.....	2
クローズアップ.....	4
役員室だより.....	8
ナウスペシャル.....	18
キャンパスニュース.....	20
表彰等.....	38
人事.....	40
名誉教授リレー随想.....	42
訃報.....	44
インフォメーション.....	46
インタビュー.....	48
海外レポート.....	50
クラブ&サークル紹介.....	54
ガイドマップ.....	55
交流協定大学紹介.....	56



表紙写真：理学研究科宇宙地球科学棟
玄関ロビー壁画

撮影：理学研究科助教授 山本 仁

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第6回大阪大学フォーラム



歯学研究科米田俊之教授

JICA(国際協力機構)と連携

大阪大学と独立行政法人国際協力機構(JICA)は、2月16日(金)に大阪大学中之島センターで連携協力協定を締結しました。

この協定は、日本と開発途上地域の人々の平和で豊かな世界の実現をめざし、開発途上地域への国際協力にかかわる事業の推進に向けて、本学の全学的研究・教育の成果とJICAの現場実践を生かした連携を相互に可能な分野において行うため締結されたものです。

当日は、JICA側から緒方貞子理事長、加藤 宏国内事業部長及びJICA大阪センター関係職員、本学側から宮原秀夫総長、鷲田清一理事・副学長、橋本日出男理事、佐々木順司理事・事務局長及び関係教職員が出席し、調印式と記者会見が行われました。

をサンディエゴで開催

大阪大学フォーラムは、本学の優れた研究活動を広く海外で発信するため、毎年テーマを厳選し、平成14年からこれまでアメリカやヨーロッパなど各地で開催してきました。本年度は、「Frontier of Biomedical Research and Beyond」（医科学研究の最前線とその未来）と題し、世界的レベルのバイオメディカルの中心地カリフォルニア州サンディエゴで、Hyatt Regency La Jollaを会場として、平成18年12月4日(月)と5日(火)の2日間、開催されました。

歯学研究科、生命機能研究科、医学系研究科、薬学研究科、微生物病研究所の研究者、また共催機関であるカリフォルニア大学サンディエゴ校及び後援機関であるスクリプス、パーナム、ソーク研究所等の研究者、25名が、2日間にわたり、第一線の研究活動の成果を発表しました。

参加者は、これらの大学、研究機関を中心に約240名にのぼり、中には、阪大出身者や北米地区在住の本学同窓生も見られました。そうした人からは、母校が海外でこれだけの規模のセミナーを開催することに感銘を受けたという感想も聞かれました。

また、会期中、宮原秀夫総長一行はカリフォルニア大学サンディエゴ校を訪問し、同校Marye Anne Fox学長と会談するなど、本学との研究・教育交流について活発な意見交換を行いました。



サンディエゴ校にて

協力協定を締結

また、調印式後には、本学関係教員も加わって、「人間の安全保障」をテーマとした懇談会が行われ、小泉潤二総長補佐の司会により、関係教員・JICAからの研究状況の報告・意見交換が行われた後、緒方理事長から所感が述べられました。



握手を交わす緒方理事長（左）と宮原総長

新しい文理融合型教育プログラムの開発を目指して

- 金融・保険教育研究センター -

金融・保険教育研究センター長 長井英生

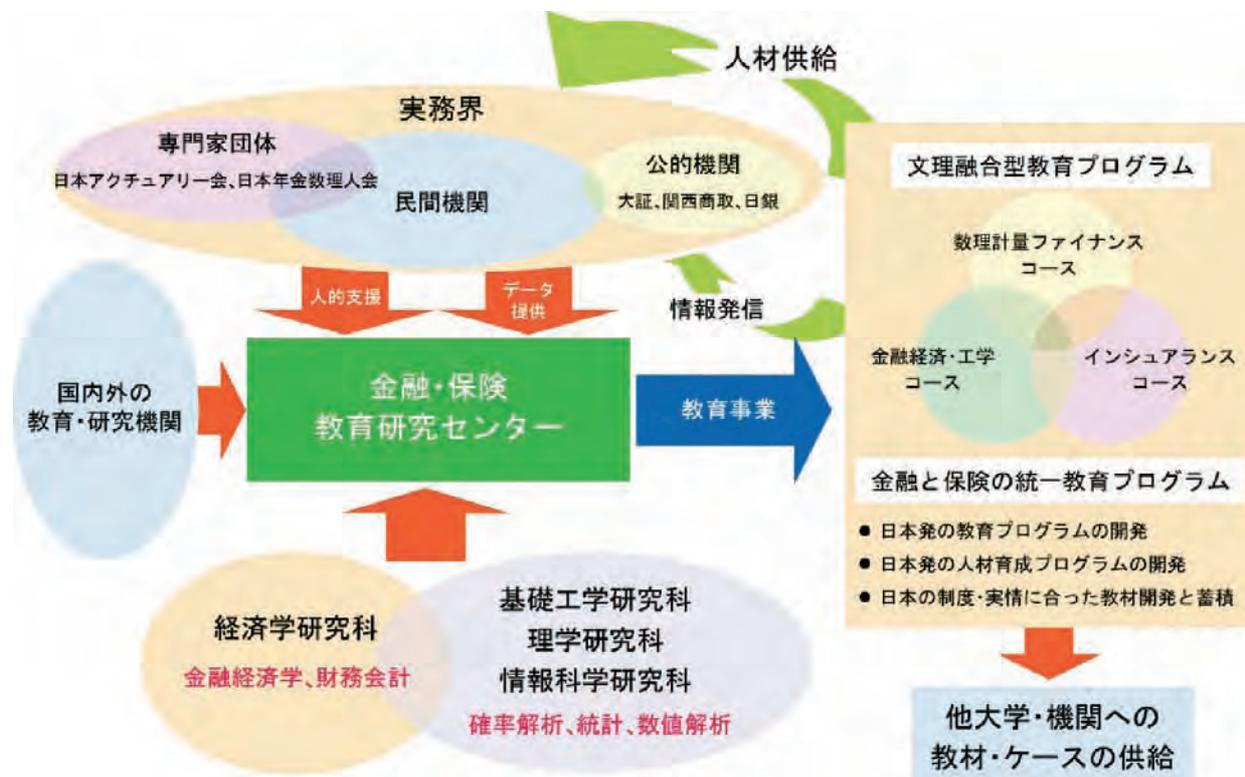
金融・保険教育研究センターの誕生

平成18年4月、金融・保険教育研究センターが発足し、高度化した金融・保険に関わる活動に対応しうる人材育成に取り組んでおります。本センターは、経済学、基礎工学、理学、および情報科学の4研究科が共同で設立した、他に類をみない新しい大学院教育と研究の組織です。

本センターが設立された背景には、国際社会における経済全体の構造改革の進展に伴い、金融や保険に類する活動の重要性が高まり、日本経済もその構造改革と世界標準のリスク管理体制の構築が重要な課題となっていることが学

げられます。また、金融実務界のみならず、家計から政策担当者に至るまで、金融・保険と、関連するリスク管理に関して、経済合理性、科学的合理性の認識に基づいた理解の促進を図ることが求められる事態となっています。その対策として、金融や保険に関する先端的な知識や科学的なリスク管理技術に精通した人材養成を行うことが緊急を要する課題となっています。

さて、金融・保険に関わる高度な教育を行うに当たり、社会・制度的側面と数理・技術的側面という2つの側面をバランスよく教育する必要があります。そのためには、文・理両分野の研究者の協力が欠かせないことをお互いが認識



金融・保険教育研究センターの概念図

し、過去数年、協力関係を築いてきた結果、本センターは設立されました。こうした協力関係を基盤に、長年にわたる、経済学研究科におけるマクロ経済学からファイナンス理論、金融工学の研究、理学・基礎工学研究科における確率論・統計学の理論と応用に関わる研究、情報科学研究科におけるOR研究の成果を持ち寄り、金融と保険に関する大学院教育の新しい文理融合型教育プログラムの開発を目指しています。

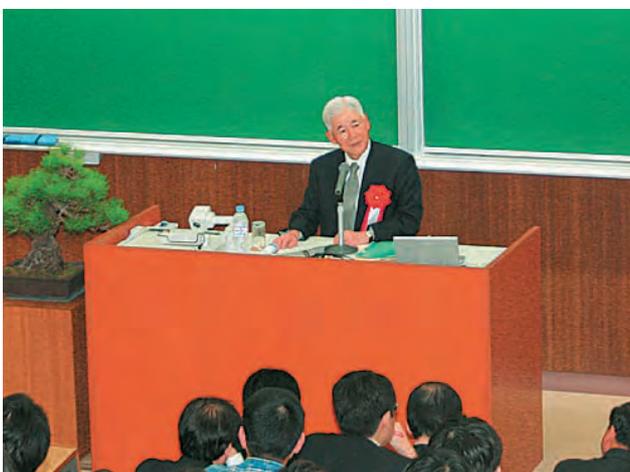
また、金融・保険に関わる問題は、実務界の活動と切り離しては考えられず、社会との連携はセンターの活動にとって大変重要となります。そのため、実務家教員の協力も仰ぎセンターの教育研究活動に加わっていただき、さらには多くの連携協力機関からもご支援いただいております。この文理および社会学という二重の連携融合が本センターの活動の基軸となっております。

大学院教育においては、常に先端的な学問成果を取り入れ、その教育内容を更新・発展させてゆくことが欠かせません。そのため、本センターの提供する教育プログラムでは博士後期課程レベルに相当するアドバンスト・プログラムを設けており、そのことが一つの特徴となっております。このプログラム開発には、先端的な研究を行っている外国人教員も加わり、高度な教育を提供いたします。さらに、高度な大学院教育プログラムの開発を目指す過程で、新たな学問的課題が提起され、文理融合領域の発展のみならず、文理両分野でその専門性の深まりを要請されることも期待されます。

設立記念式典・記念講演・祝賀会

11月27日(月)本センター設立記念行事が行われました。

記念式典では宮原秀夫総長による挨拶、仁科一彦理事・副学長の式辞、近藤信司文部審議官からの祝辞、センター長による本センターの概要の説明がありました。



福井総裁の講演

記念講演では日本銀行総裁福井俊彦氏による「新たな時代を迎えた日本経済と金融」と題した講演が行われました。約200名の参加者を迎え盛大に行われました。記念講演の後、祝賀会がレストラン「宙」にて開催され、米田信夫大阪証券取引所社長、宮西正宜元大阪大学副学長からの祝辞の後、小谷真一理学研究科長の乾杯の発声により始まり、和やかに行われました。

教育プログラム

<教育体系>

本センターが提供する教育プログラムは、スタンダード・プログラム(博士前期課程相当)とアドバンスト・プログラム(博士後期課程相当)の2つから成り立っています。

各プログラムとも、(A)数理計量ファイナンスコース、(B)金融経済・工学コース、(C)インシュアランス・コースの3コースがあり、学生は所属する研究科の専攻教育とともに、このプログラムを受講することができます。また、各プログラムの科目等履修生となることで、社会人再教育、金融実務家研修等が行える社会人再教育プログラムが提供されています。受講者は規定の単位を修得することによって、教育プログラムの修了認定を受けることができます。

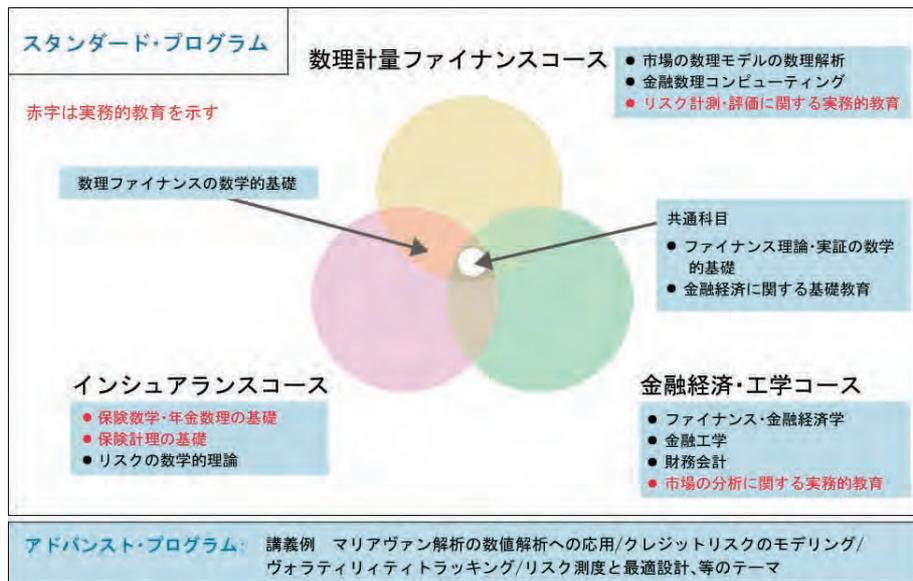
特に、アドバンスト・プログラムでは、最近20数年の間に急速に発展してきている金融工学・数理ファイナンス・保険科学の新たな学問成果が教育プログラムに直ちに反映されるように、従来の博士後期課程に相当するレベルの内容を提供します。

上記の2つのプログラムにおいては、実務教育にも対応できるよう集中教育等による柔軟な教育形態をとっています。また講義を集成したレクチャーノートシリーズを刊行していく予定です。

<各コースの概要>

・数理計量ファイナンスコース

「数理計量ファイナンスコース」では、3コース共通で学ぶファイナンス理論・実証の数学的基礎および金融経済に関する基礎教育を踏まえ、数理的・計量的手法の習得を主眼においた数理ファイナンスに関わる教育プログラムを提供しています。裁定理論・マルチンゲール理論に基づく市場の数理モデリング、とその数理解析、特にその解析手法として重要な、時系列解析、確率微分方程式・確率解析、統計解析、数理計画法、確率制御に関する豊富なカリキュラムを提供し、それらを援用した数理・計量ファイナンスの高度な教育を目指しています。また、リスク計測・評価と管理に関する新しい数学的基礎理論に関する講義や実務家教員による実務的側面からの教育も用意しています。



教育プログラム

・金融経済・工学コース

「金融経済・工学コース」では、近代経済学を確固としたバックグラウンドとして、ファイナンス理論を体系的に学ぶことを一義的な目的としています。その一方で、その実学としての側面を重視した工学的視点から、広範にわたる関連分野への応用力を効率的に修得することをも大きな柱としています。したがって、ファイナンス・金融経済学・金融工学の基礎理論はもちろんのこと、確率・確率過程や最適化に関する基礎数理、金融資産の運用・価格付けやリスク・マネジメントに関する数理・数値計算スキル、各種金融データに対する統計的・計量・実証分析、金利や為替レートに関する金融政策の経済分析、事業や企業の分析・評価、等々について、非常に高度でバラエティに富んだカリキュラムを提供いたします。

・インシュアランス・コース

「インシュアランスコース」では、平成18年第1学期（前期）には、数理ファイナンスおよび保険数学の数学的基礎を学ぶための科目（確率論の基礎、確率解析、保険数学1および同演習など）を開講しました。第2学期（後期）にはさらに進んで、より実務に近い内容を学ぶための保険計理、リスク理論、モデル理論（集中講義）を開講しています。今後は、数理保険学の学問的研究成果を取り入れた授業についても充実させていく予定であります。保険関係の科目の講師の多くは実務経験者です。講義・演習などを通して、保険の数学的側面に含まれる課題、実務の側面の課題の分析・解明を深めていくことを目指します。

<平成18年度実績>

センターの教育プログラムには、各研究科から81名の登録者がありました。その内訳は、基礎工学研究科36名、

経済学研究科15名、理学研究科14名、情報科学研究科14名、工学研究科1名、国際公共政策研究科1名です。また科目等履修生も3名受け入れました。

センターの組織

本センターの運営は、正・副センター長と基礎工学研究科、経済学研究科、理学研究科、情報科学研究科の4研究科長、およびその他の教授からなる運営委員会で行われ、教育研究の実施に関する事項については、センター教員からなる実施専門委員会で議論されています。また、本センターの教員は、(1)基礎工学研究科、経済学研究科、理学研究科、情報科学研究科の4研究科の兼任教員と、(2)国内外の特任教員、そして(3)連携機関からの派遣教員の3つから構成されています。

平成18年度は、国内から次の3人の特任教員を採用しました。

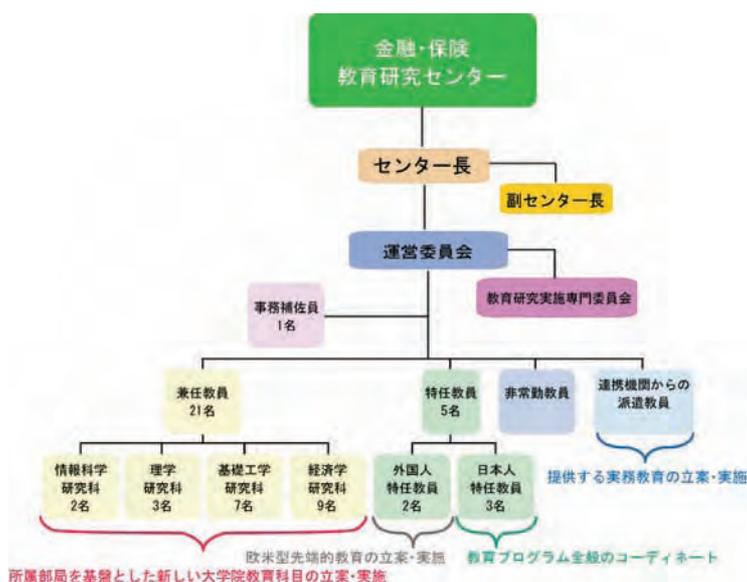
- 石島 博 助教授
(ファイナンス理論・金融工学)
- 中野 張 助手
(数理ファイナンス)
- 室井 芳史 助手
(金融派生商品の価格理論)

また、外国人特任教員として

- Cont, Rama 教授
(Ecole Polytechnique CNRS 研究員)

- Dupacova, Jitka 教授
(Chales University (チェコ) 数理学部教授)

の2人を採用し、金融・保険に関わる世界の最先端の講義を開講しました。



組織図

研究活動

金融・保険教育研究センターでは、常に最新の知識と情報を得るために、金融経済学・金融工学・数理計量ファイナンス・保険科学の分野で活躍されている研究者の方を招き、金融・保険セミナーシリーズを開催しております。また、大阪大学金融・保険ジョイントセミナーでは、他研究科と共同で金融・保険にかかわる分野のセミナーも開催しております。これらのセミナーのほかに、ワークショップの開催を通じて世界的に高度な金融技術を駆使する実務家や最先端の研究者との交流を図っています。本年度はセミナーシリーズとして3回、ジョイントセミナーを1回開催しました。また、国際ワークショップ「Mathematical Finance and Stochastic Control」8月24日(木)～27日(日)(ホリディン京都)を共催し、外国人研究者18名を交えて研究交流を行いました。さらに、金融実務家も交えた社

学連携ワークショップ「金融工学・数理ファイナンスの諸問題」12月7日(木)～8日(金)(大阪大学中之島センター)を開催しました。

連携協力機関

本センターの教育理念に賛同いただいた以下の機関からは、実務的な教育を含めた様々なサポートを頂いています。

(50音順) 大阪証券取引所、関西商品取引所、住友生命保険、大同生命保険、ニッセイ基礎研究所、日本IBM、日本政策投資銀行設備投資研究所、日本銀行金融研究所、野村證券および同金融工学センター、三井住友銀行、三菱UFJトラスト投資工学研究所

金融・保険教育研究センターホームページ
<http://www-csfi.sigmath.es.osaka-u.ac.jp/>



ワークショップでのコハツ助教授の講演

ながい・ひでお

プロフィール

基礎工学研究科システム創成専攻教授。昭和50年3月大阪大学大学院理学研究科修士課程修了。東京都立大学、徳島大学、名古屋大学を経て平成7年4月大阪大学基礎工学部教授。平成18年8月から金融・保険教育研究センター長。

役員室だより

2007.2 Vol.16

1月29日から31日の3日間にわたり、「総長・理事による概算要求等ヒアリング」を実施しました。ヒアリングでは、単に要求事項の説明だけでなく、部局の中期計画及び年度計画の進捗状況等についても説明いただきました。また、役員側からは、平成17年度の達成状況の部局評価コメントを伝えました。全体的に各部局ともそれぞれ中期計画の達成に向けて着実に取り組まれていることが伺えました。なお、要求事項に関してはヒアリングの結果を踏まえて、その適否について検討し、第一段階の整理を行いました。特に概算要求事項については、今後更に精査、検討の上、大阪大学としての重要度、必要性等を総合的に勘案して絞り込んでいくことにしています。

本学と大阪外国語大学との統合については、前号(1月号)で統合に伴う学部及び大学院の組織再編案についてお知らせしたところですが、この統合によって新たに展開されることとなる教育研究の様々な取り組みや事業計画などについて、今月から毎号最後の頁に連載していく予定としていますので、是非ご一読願います。

各室の検討状況

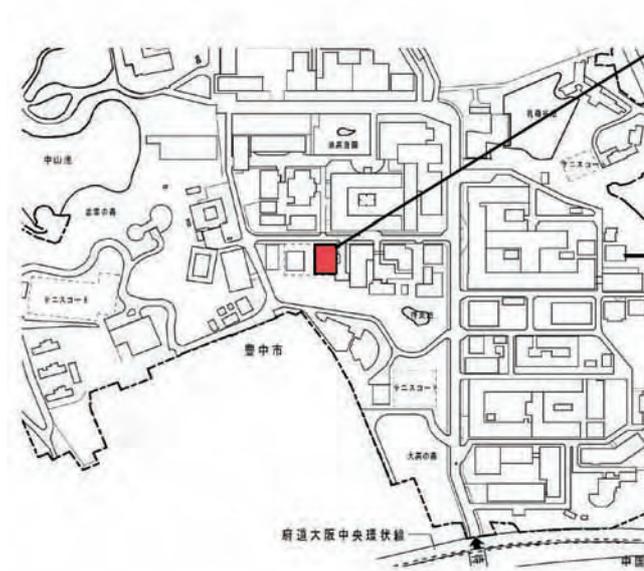
総合計画室

文系総合研究棟の建設

豊中地区における教育研究スペースの狭隘解消を目的とした施設整備事業として、「文系総合研究棟」が建設されることになりました。施設マネジメント委員会及び豊中地区部局長会議等で配置計画や使用目的について協議を重ねられ、このたび以下の予定で施工される運びとなっています。



外観イメージ



文系総合研究棟

構造：鉄筋コンクリート造
 規模：地上7階、延べ面積7,297㎡
 （建築面積1,293㎡）
 着工：平成19年2月
 竣功予定：平成20年1月末

豊中キャンパス

同窓会連合会の動き

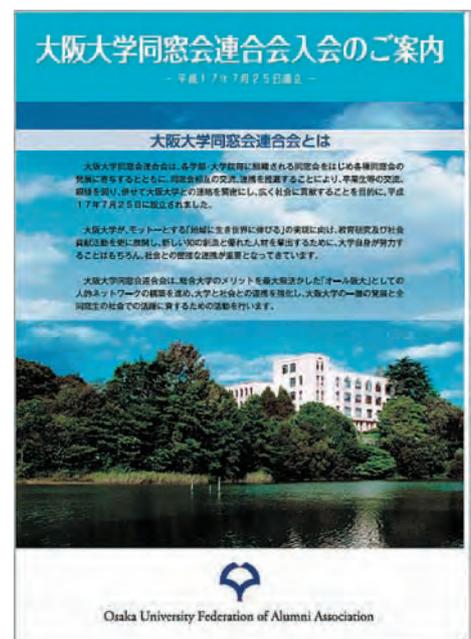
前号でお知らせしたとおり、学生（新卒業生）及び教職員を対象に入会案内を開始しました。既に案内パンフレット等がお手元に届いているかと思いますが、皆様のご入会をお待ちしています。

入会資格は部局同窓会会員又は教職員となっており、部局同窓会会員になっておられない方はそちらへの加入もよろしく願いいたします。

なお、過去の卒業生及び教職員OBにも順次入会案内を送ることにしています。

(同窓会連合会HP)

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>



教育・情報室

ティーチング・アシスタント（TA）制度の改善

TA 制度は、大学院生が教育の補助業務につくなかで、将来、教育者として、あるいはリーダーとして活動するための素養を身につけるというトレーニングの場であると同時に、大学にとっても日々の教育に TA の活動を導入することで、学生一人ひとりの教育をより細やかにおこなうことができ、ひいては大阪大学の教育の質を向上させるためにも非常に重要な意味をもっています。ところが一方で、従来の TA 制度は、実験や演習授業の補助というふうにその業務が限定されていたがために、事務手続きが煩瑣になったり、実際の教育補助業務に見合う手当がつかなくなったりというふうに、さまざまな問題点があり、それが TA のモチベーションをそくような一面がありました。そこで、教育・情報室では、これまでほぼ 2 年間をかけて、全学的なアンケート調査をおこない、TA 制度の見直しについての全学的な協議をくりかえした上で、2007 年度より TA 制度を大幅に改革することにしました。

具体的には、これまで実験と演習の補助業務に限定されていた TA 業務を、各部局が教育上必要と認めるものすべてに拡大するというものです。このことで今後、授業補助のみならず、初学者のための補習や、IT 支援、FD 活動の補助など、部局が教育の質の向上のために必要と判断するすべての教育補助活動に拡大することが可能となります。同時に、各部局の裁量で RA 経費を TA 経費に移算することも可能とし、TA 制度をより一層積極的に活用していただけるよう図りました。さらに同時に、TA 業務にあたっての事務手続きの大幅な簡素化も図りました。各部局におきましては、大学教育の質の向上のために TA 制度をどのように活用するか、学生の意見も聴きつつ、それぞれに工夫をこらしていただきたく思います。

学生と副学長・学生生活委員会との懇談会

教育・情報室の新たな試みとして、1月24日(水)と2月5日(月)に豊中地区と吹田地区それぞれで、学部学生代表と教育担当副学長・学生生活委員会との懇談会を開催しました。授業内容からキャンパスの利用、学生生活の支援まで多方面にわたる意見交換をし、事後のアンケートでは次回の懇談会にもぜひ参加したいという学生が 90 パーセントを超えるなど、意義のあるものでした。

大学がさまざまな教育改革を試みている一方で、学生にはそれら新たな教育事業の取り組みが思うほど知られていないということには強い反省を強いられました。また、学生（とくに医歯薬系・工学系の学生）が、自己の知見を拡げるために、他学部の授業の履修や他学部学生とのより活発な交流を強く希望していることがわかりました。これらを今後の教育改革に活かしていきたいと考えています。



豊中地区



吹田地区

大阪外国語大学との統合によって設置される教育組織、開設される教育プログラム

大阪大学はこの秋、大阪外国語大学と統合し、新生「大阪大学」として生まれ変わります。この統合を機に新たに設置される大学院専攻や学部・学科、センターの概要、また新たに開設される教育プログラム等については、本号より特集記事として、順次、紹介していきます。

研究推進室

財団法人武田科学振興財団2007年度一般研究奨励の学内選考

本研究奨励に対して学内関係部局から推薦のあった15名の中から、研究推進室で編成したワーキングメンバーにより、当該財団からの推薦枠5名に対する学内選考を行いました。

本学の推薦内訳は次のとおりです。

医学系研究科（1件）、薬学研究科（2件）、生命機能研究科（1件）、微生物病研究所（1件）

大阪大学研究懇話会

今回で12回目となる大阪大学研究懇話会を、3月13日(火)に医学部銀杏会館で開催します。研究懇話会は、関西の企業等に対して大阪大学における研究活動等の情報を提供するとともに、本会を通して企業等から研究者等人材の養成、共同研究の実施など本学に対する要望等を受け、本学の教育研究に反映することを目的としています。

今回のテーマは、「大阪大学の基礎研究と産業応用」とし、本学の医学系研究科、工学研究科、情報科学研究科、接合科学研究所、先端科学イノベーションセンター及び金融・保険教育研究センターの教員により、本学における基礎研究と企業化の成功例を中心とした内容の講演を行っていただきます。

平成19年度研究支援推進経費・非常勤研究員経費の配分

研究支援推進経費及び非常勤研究員経費の目的等、配分先及び平成19年度配分額は下記のとおりであり、研究推進室では、このたび、関係附属施設、センター及び研究所への配分案を決定しました。

経費名称	目的等	配分先	平成19年度配分額
研究支援推進経費	研究プロジェクト等の遂行に必要な技能・技術面での支援者を確保し、本学における学術研究の効果的な推進を図るための経費	関係附属施設、センター及び研究所	80,311千円
非常勤研究員経費	高度な研究能力を持つ若手研究者を特定の共同研究プロジェクト等に参画させ、本学における研究活動の一層の促進を図るとともに研究者としての人材育成に資するための経費	関係附属施設、センター及び研究所	125,880千円

評価・広報室

平成19年度評価関係スケジュール

平成19年度の年度評価（18年度実績報告書）、達成状況評価及び基礎評価について、下記のスケジュールで実施を予定しています。

年 月	19年												20年		
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
年度業務実績報告書			実績報告書作成班において報告書作成 (6月30日文科省へ提出)												
達成状況評価						評価・広報室において達成 状況評価書(案)の作成		部局へ意見照会			学内局 達成状況 HPで 公表				
基礎評価			基礎データの収集					評価部門において基礎 評価書(案)の作成			基礎評価書の決定 (部局へ通知)			H HPで 公表を 学内 専用	

19年度の広報活動の取り組み

大阪外国語大学との統合に伴う広報活動

平成19年10月の大阪外国語大学との統合に伴い、ホームページのリニューアル、統合時のパンフレットの作成、新大阪大学のPRの方法等の取り組みについて、現在検討中です。

広報刊行物発行スケジュール

	19年												20年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
阪大ニュースレター			○			○			○			○			
阪大NOW	○		○		○		○		○	○	○				
役員室だより	○		○		○		○		○		○				
学報(学内HP)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

■ は、統合特集の予定。

【記事提供のお願い】

各部局、個人、サークル等 ユニークな活動や取り組みがありましたら、情報、記事等の提供をお願いします。

E-mail : souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp

財務・会計室

平成18年度間接経費(第2次)執行計画

平成18年度間接経費の第2次執行計画案を財務・会計室で策定し、12月25日の役員会で審議・了承されました。

採択事業の詳細は以下のとおりです。

・間接経費 13事業

(単位：千円)

部局名等	事項名	金額
総合学術博物館	総合学術博物館(修学館)改修経費	54,800
工学研究科	造船水槽実験棟変電設備改修工事	30,744
微生物病研究所	非常用発電機更新工事	17,000
核物理研究センター	実験研究棟トイレ改修工事(2-1)	11,466
医学系研究科	医学系研究科基礎研究棟他外壁改修工事(2-1)	8,760
薬学研究科	本館ベランダ防水工事	5,250
文学研究科	美学研究棟壁面防水改修工事(2-1)	4,522
事務局(総務部)	コンベンションセンター空調機改修工事	3,885
安全衛生管理部	アスベスト含有物品処分委託費	2,688
接合科学研究所	荒田記念館多目的ホール屋上防水工事	2,499
事務局(学生部)	豊中カフェテリアらぶおれアプローチタイル他補修工事	2,352
事務局(国際交流推進本部)	海外拠点等勤務規程制定のためのコンサルタント経費	1,890
事務局(総合計画室)	保育所運営コンサルタント業務委託	315
計		146,171

教育研究等重点推進経費

平成18年度より、本学の教育研究基盤作りをより一層推進するための経費として「総長裁量経費」が「大学基盤推進経費」に変更されました。これにあわせて、財務・会計室では間接経費及び重点経費についても、その使用目的等が的確にわかるように名称や要求区分等の見直しを行ないました。

その結果、教育研究全般に渡る柔軟な予算配分が行なえるよう、「重点経費」及び「間接経費」を一体化し、平成19年度より「教育研究等重点推進経費」を新たに設けることとしました。

本経費の詳細については、次頁の図をご参照ください。

なお、本経費については既に公募を終了し、現在、財務・会計室において配分審査を行なっています。

「重点経費」「間接経費」から「教育研究等重点推進経費」への移行



人事労務室

「教職員給与規程」等の改正

本学では、平成18年の人事院勧告を受け、同勧告に依拠した給与改正を基本的には実施するとの方針の下に、給与規程等の改正を行うこととしました。具体的には、

地域手当は、国の支給割合とは一部異なり、吹田市・豊中市・茨木市及び中之島を基本的に同一生活圈と考へて同一の割合とし、現行の11%から12%に引き上げ、

国の少子化対策に賛同し、扶養手当を国同様に増額(3人目以降の子等 5,000円 6,000円)することといたしました。

【平成19年4月1日改正】

国際交流推進本部

国際交流に関する教職員研修会

大阪大学では、本学の国際化を進めていくためには、学生・研究者の交流とともに、国際化をにやう人材の育成が重要であると考えています。そのため、教職員を海外に派遣し、語学の取得や人的ネットワーク構築の機会を与えることを心掛けてきました。また、その一環として、国際交流に関する教職員研修会を開いています。昨年度は、3月9日に行い、その様子は、阪大NOW 2006年4月号に報告されています。

このたび、12月13日、第2回研修会が開かれ、約30名の参加がありました。今回は、辻 毅一郎総長補佐・国際企画室長より、世界の大学の国際化の潮流、日本の大学の国際交流の動向、大阪大学の国際交流の目標や活動内容についての報告がありました。報告後、辻総長補佐と参加者の中で「大阪大学としてもっと独自性のある国際交流を期待する」「教職員・研究者の海外派遣を推進すべきである」「交流協定の実態を把握し、評価すべきではないか」など、予定の時間を大幅に越えつつも、活発な意見交換が行われました。参加者のアンケートからは、学内における国際交流に関する情報を得る機会が少ないため、このような研修会をもっと開いて欲しいという意見が多く、今後もこのような教職員研修会を開いていきたいと思っています。



橋本理事



辻総長補佐

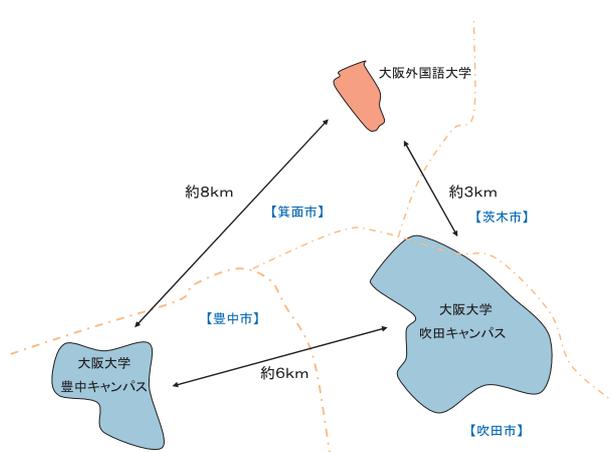
役員室だより(大阪外国語大学との統合)

大阪大学は新しく生まれ変わります

vol.1

2007年10月、大阪大学は大阪外国語大学と統合し、新しい「大阪大学」として生まれ変わります。大阪大学のすぐとなり箕面市で、長きにわたって多彩な外国語教育を展開してきたこの大学との統合によって、大阪大学はその教育・研究をさらに大きく飛躍させようとしています。

「阪大NOW」では、この統合によって開かれる大阪大学の教育・研究のさまざまな取り組みや可能性について、順次、紹介していきます。



大阪外国語大学

- 毎日新聞社提供 -

大阪大学・大阪外国語大学のアウトライン

	設置	学生数	教職員数	予算 (18年度)	キャンパス面積	留学生数	交流協定数	蔵書数
大阪大学	1931年	19,952人	4,618人	約1,056億円	1,523千m ²	995人	249件	約324万冊
大阪外国語大学	1949年	4,899人	253人	約48億円	147千m ²	347人	73件	約63万冊

両大学の平成18年度大学要覧から抜粋(平成18年5月1日現在)

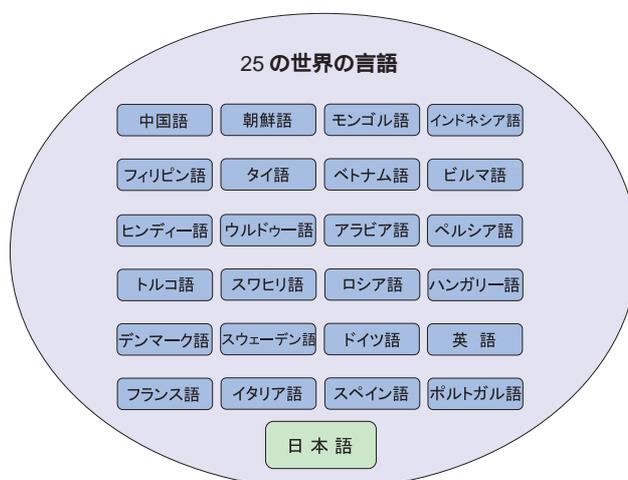
真に国際的な人材の養成

このたびの両大学の統合のめざすところ、その第一は、「大阪大学の」多彩な専門的学術研究・教育のシステムと「大阪外国語大学の」多彩な外国語教育のプログラムとを組み合わせることで、たとえば、経済学の専門家であり、かつアラビア語を読み話すことのできる人材、医学の専門家であり、かつベトナム語を読み話すことのできる人材、国際政治の専門家であり、かつ東欧の言語に通じている人材を養成することにあります。

これは、高度な専門研究・教育を担っている総合大学と、24の多彩な外国語教育を担ってきた単科大学の統合によってはじめて可能になることです。大阪大学はこのことによって、今後、全国にも例のない新しい教育・研究に取り組んでいくことになります。

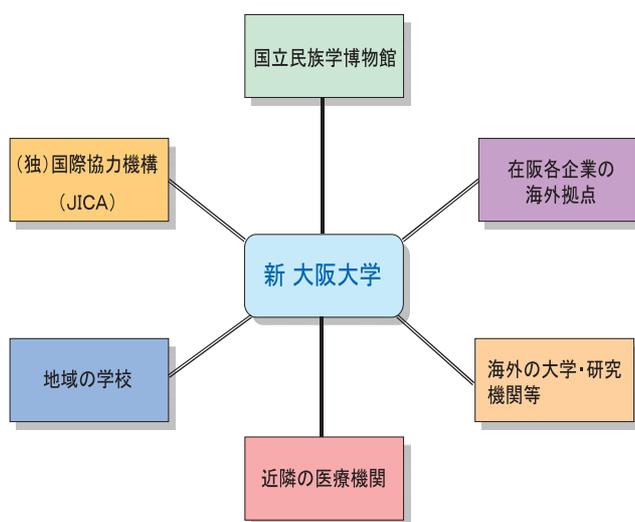
共通教育「外国語」の新しい可能性

これまでの総合大学では、入学後に学ぶ外国語といえば、まず第一に英語、第二外国語としてはドイツ語、フランス語のほかにごく限られた外国語がつけ加わる程度でした。新しい大阪大学の全学共通教育では、外国語の選択範囲が、英語、ドイツ語、フランス語のほかに、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語、朝鮮語へと広がります。さらに専門課程、大学院へと進学すれば、それぞれの専門領域の学習と並行して、日本語も含め計25の世界の言語を学ぶことができるようになります。このことで、将来つくことのできる職種や社会活動の範囲が大きく広がります。



- 飛躍的に拡大する語学教育 -

地域貢献 - 足もとの国際化



- 社会学連携のイメージ -

進行する多文化的（マルチカルチュラル）な社会のなかで、わたしたちは外国人研究者・労働者とその家族が健やかに安心して住める地域社会づくりを推進しなければなりません。いわゆる「足もとの国際化」です。医系や法学系などの教員と外国語学部の教員が協力して、病気をしたときやトラブルに巻き込まれたときにきちんと仲介してくれる医療通訳や司法通訳を養成するとともに、多文化間のコミュニケーターを養成するプログラムの開発と提供などが、この統合によって可能になります。また、海外に企業拠点をもつ（あるいは、海外から外国人労働者を招聘する）関西企業の国際交流支援などにも、本格的に取り組むことができるようになります。

さらに、この統合を機に大阪大学は、近隣にある国際研究・協力の機関である国立民族学博物館や国際協力機構（JICA）と連携を深めることで、北摂地域一帯が、バイオ研究の拠点と同時に、国際協力における知的集積のきわめて高いエリアとして、全国に強烈な存在感をさせるようになります。

以上の教育ならびに社会学連携の事業は、主として、統合を機に新たに設置される新しい専攻・学科、各センターにおいて取り組まれます。（阪大 NOW 1月号参照）

次号からは、これらの部局において開始される新たな教育・研究プログラムや社会学連携事業について、さらにはキャンパス・ライフの変化などについて、順次、紹介していきます。みなさまのご意見も紙面に反映させていきたいですので、ご質問、ご意見をお寄せください。

（文責）大阪大学理事・副学長 鷲田清一

「中之島にコミュニティカフェを！」 - 新しい社学連携の形 -

コミュニケーションデザイン・センター教授 平 田 オリザ

2005年4月に開設されたコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）は、「専門的知識を持つ者と持たない者、利害や立場の異なる人々、その間をつなぐコミュニケーションデザインを構想、設計する」（当センターホームページより）ことを目指して活動を続けてきた。その中でも特に、本学の社会貢献の大きな軸である社学連携に力を入れ、現在、様々なプロジェクトを推進している。

しかし、いったい社学連携とは何だろうか？

たとえば昨今、多くの大学が、大学の知財の社会還元と銘打って、サテライトキャンパスなるものを繁華街の駅前に開設している。だが、それは単に、あいかわらず社会に閉ざされたままの教室を、駅に持ってくることで、多少の利便性を求めただけのことではないのか。そんなことをして、どこその語学学校のような「駅前大学」を林立させても、社学連携とはならないだろう。

大学の知の蓄積を、どうにかしてダイレクトに社会に開いていくことはできないものか。そんなことを、つらつら考えているときに、京阪電鉄から、「中之島新線の新しい駅で何かできないか？」という話が来た。

そこで私は、この新駅（なにわ橋駅）で、まったく新しいコミュニティスペースとしてのカフェを運営できないかと考えた。

たとえばそれは、以下のようなものだ。

日頃は普通に営業をしているカフェスペースに、だいたい夕方5時半から7時半くらいの間、毎晩、何かを議論している場が存在する。現在、学内で様々に行われている「哲学カフェ」や「サイエンスカフェ」「減災カフェ」などを、毎日、定期的に、一定時間開催するのだ。



クレーンに吊られたバナー。
遠方からでも目立つ仕掛け。

（撮影：八久保敬弘）

ちなみに、この「カフェ」というのは、専門家がコーディネーターとなり、市民が、対等な立場で哲学や科学についての対話を行う場のことを指す。「愛とは何か？」「尊厳死は許されるか」「携帯電話の功罪」というように扱う領域は何でもいい。その日のテーマに沿って、二時間ほど



会場は中之島公会堂のすぐ向かい側



メイン会場。すべて工事資材を利用して空間構成されている

（撮影：八久保敬弘）

の議論を行い、参加者は、特に意見表明を強要されるようなこともなく、結論を下す必要もない。あくまで議論を楽しみ、その深まりを成果として帰って行く（CSCD では、来年度からは、豊中キャンパスに、半常設のカフェスペースを設置する）。

北浜の証券会社に勤務する通勤客たちは、それを横目で見ながら、「一体、毎日あそこでは、何を議論しているのだ？」と不審に思うことだろう。しかし、その日のトピックによっては、彼らも議論に参加してくるかもしれない。それは、大阪大学から金融工学の第一人者が来て、「いま日銀の利上げは是か非か」という話題を議論する時かもしれないし、あるいは「熟年離婚はなぜ起こるか」というトピックの時かもしれない。

こうして、大学に蓄積された知が、なかば強引にダイレクトに還元され、市民の興味に応じて参加自由な知的空間を創出する。新駅の立地は完全なオフィス街であるから、乗降客の激減する週末には、ここをアートスペースと位置づけて、ダンスやパフォーマンスも開催する。土曜日の午前中などは、地域の小中学生を対象にした子ども向けのサイエンスカフェを開催することもできる。

また、その際には、駅的设计段階から関わって、対話の起きやすいデザイン空間を創る。もしもこれが実現すれば、世界でも類を見ない大学が関与する新しい駅の形、誰も見たことのない社会学連携の場が、阪大にも縁の深い中之島のど真ん中に出現することになる。

昨年の10月には、カフェ開設に向けての試行実験として、新駅の工事現場周辺を使って、「駅ができる！」という大きなカフェイベントを開いた。現場の地上部分では、「哲学カフェ」や「サイエンスカフェ」を開き、地下30メートルの工事現場ではコンテンポラリーダンスの公演を行った。



哲学カフェの様子。活発な対話がなされた

できるなら、この実験を来年、再来年と続けて、少しずつ新しい対話空間の形を模索していければと思っている。

場はできつつある。ここに、学生の、積極的な参加を期待したい。



ケータリングカーを誘致して特設のカフェをオープン



ライトアップされた特設ゲート



夜のカフェの様子。連日熱気あるトークセッションが実施された

ひらた・おりざ

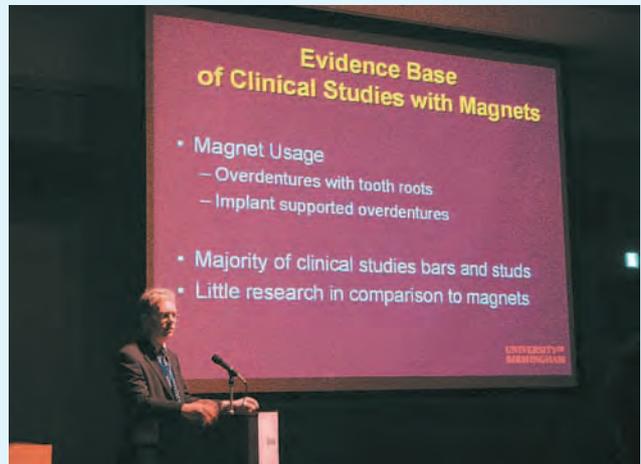
プロフィール

昭和61年国際基督教大学卒業。劇作家、演出家。劇団青年団主宰。桜美林大学教授を経て、平成18年4月コミュニケーションデザイン・センター教授。

第2回Asian Academy of Osseointegration開催

10月28日(土)・29日(日)、歯学部附属病院口腔総合診療部の主管で、Asian Academy of Osseointegration (AAO) 学会が、大学院歯学研究科21世紀COEプログラムの支援を得て本学中之島センターで開催されました。学会には日本国内をはじめ、韓国、中国、台湾、タイ、インドネシア、カナダ、イギリスから2日間で延べ170名の参加者があり、歯科インプラントに関する基礎、診断、治療計画、外科、歯周、補綴の各分野やその境界領域での最新の研究結果が紹介されました。特に日本の講演者の水準の高さがアジア各国の参加者にインパクトを与え、この分野におけるわが国の臨床技術、研究レベルの高さを正確に発信する機会となりました。

(大学院歯学研究科・歯学部)



第15回理学研究科技術職員研修実施

理学研究科は、9月8日(金)の学外研修(大阪市立大学)に引き続き、11月10日(金)に「第15回学内研修」を実施いたしました。

この研修は、同研究科の技術部職員が独自に企画・実施を行うことにより、技術部運営の経験と実績を積み重ね、自己及び相互啓発の機会を与えるとともに、専門技術の知識・技量等の向上を図ることを目的としています。



まず研修に先立ち、渡會 仁技術部運営委員会委員長の挨拶、続いて、小谷眞一研究科長より、安達清治技術専門職員(研究課題:NMRにおける安全講習の重要性)と大森博文技術職員(研究課題:PerlによるDNAマイクロアレイデータの解析と公開用Webサーバーの構築)に対する、理学研究科・技術賞の表彰が行われました。

その後、研修に入り、小谷研究科長の講話、物理学専攻・下田 正教授の「原子核 - 有限個数の量子多体系が示す複雑さと秩序、そして人間とのかかわり」、大学院生命機能研究科の小倉明彦教授による「神経科学の現在:記憶の成立機構の研究を例として」の講義が行われました。

午後からは、宮下富夫事務長による「教員組織の改正に関して」の講義、引き続き、技術賞受賞者の発表、技術発表、出張報告が行われました。

講演等の終了後は、活発な質疑応答、意見交換があり、技術職員としての、今後の業務に大変有意義な情報交換の場となり、最後に、受講生全員に修了証書が授与されました。

(大学院理学研究科・理学部)

サステナビリティ・サイエンス研究機構が国際シンポジウム開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）は、11月4日（土）～7日（火）にベトナムのハノイ市とホーチミン市の二都市で、国際シンポジウムとワークショップを開催しました。

4日（土）には、シェラトン・ホテル・ハノイで、サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）、ベトナム国立大学ハノイ校との共催で、国際シンポジウム「Establishing Recycling-Oriented Society for Sustainable Asian Cities」を開催し、日本とベトナムから約50名が参加しました。



ホーチミン市の国際ワークショップ

11月22日（水）には医学部銀杏会館で、「アジアの循環型社会の形成」をテーマに第1回国際シンポジウムを開催しました。

同研究機構は2006年4月、持続可能な社会を目指すための学術体系「サステナビリティ学」を構築し、その専門家を育成する世界最高峰の研究拠点を国内に作ることを目的とする文部科学省科学技術振興調整費プロジェクトとして、東京大学など国内5大学とともに、本学の全学組織として発足しました。RISSは阪大の強みであるエコ産業技術を駆使し、アジアの循環型社会の実現を図る研究を担当しています。

シンポジウムでは日本の大学の他、中国からは中国科学院、上海交通大学、韓国からはソウル大学、ベトナムからはベトナム国立大学ホーチミン校より、各国を代表する研究者が講演を行いました。学界、官庁、自治体、産業界、外国政府機関から多数の参加があり、日本経済新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞など主要全国紙が記事を掲載するなど、サステナビリティに関する各界の関心の高さがうかがわれました。

アジア地域における持続可能な都市の構築に向けたサステナビリティに関連する産業活動、交通、水資源問題、都市計画といった様々な分野について議論が行われました。

6日（月）、7日（火）には、ホーチミン市のニュー・ワールド・ホテル・サイゴンで、IR3S、ベトナム国立大学ホーチミン校、ノンラム大学などとともに、国際ワークショップ「Sustainable Society and Industry Transformation with Zero Emission Initiatives」を開催し、両日とも100名以上の参加者がありました。第1部（6日）は、日本とベトナムの大学などから、「持続可能な社会に向けて」というテーマで、資源利用と廃棄物を最小限にする循環型社会の構築をベトナムでいかに進めてゆくか、を主題とした10課題の発表が行われました。第2部（7日）では、「ゼロエミッションによる産業変革」をテーマとし、日本の産業界から環境や資源に配慮した企業活動を紹介する6課題の発表が行われました。

ベトナムにおいても持続可能性への関心は高く、両会議ともに熱心な質疑応答がありました。今回の会議開催を通して、現地研究者や日本の関連企業と交流を行うとともに、多様なテーマについて情報収集ができました。



各国の最新の取り組みや今後の課題について活発に意見が交わされましたが、特に世界の投資が集中する中国の政策やその活動には注目度が高く、環境立国で知られるEUの来賓として出席したコップ・オランダ総領事が、中国政府の政策実現性を鋭く問う場面もあり、熱い議論が展開されました。

（サステナビリティ・サイエンス研究機構）

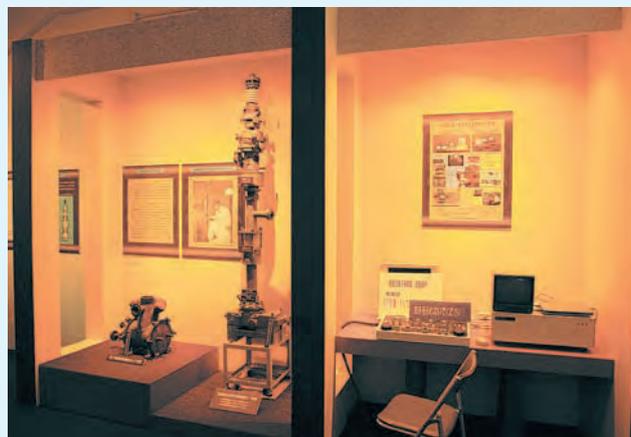
総合学術博物館特別展「『みる科学』の歴史」開催

総合学術博物館は、10月30日(月)から11月24日(金)まで、豊中キャンパス・共通教育本館(イ号館)1階において秋の特別展「『みる科学』の歴史 懐徳堂・中井履軒から超高压電子顕微鏡まで」を開催いたしました。

大阪大学の精神的源流である懐徳堂で活躍した中井履軒は、終生自らの目で「見る」ことにこだわり続け、身近な草花から、人体の内部や、はるかかなたの天体まで、自分の目で観察を続けました。その履軒の「見る科学」の足跡をたどるとともに、現在、1メートルの10億分の1まで観測することが可能となった電子顕微鏡の開発において、大阪大学が果してきた先導的な研究の足跡を展示しました。

10月30日(月)の開会セレモニーでは、宮原秀夫総長と江口太郎館長の挨拶に引き続き、テープカットが行われ、約1ヶ月にわたる特別展期間中に、学生や教職員をはじめとする学内関係者はもちろんのこと、学外からも大勢の方が見学に訪れました。観覧者は、会期中、延べ2,800名にのぼりました。

この特別展は総合学術博物館として、はじめての試みであり、館員や兼任教員等の研究に関連したテーマを取り上



国産初の電子顕微鏡1号機

げ、毎年開催している企画展よりも会期が長くじっくりと見学していただける展覧会として継続していきたいと考えております。次回の特別展として、平成20年2月に大阪歴史博物館で大阪の古地図に関する展示を予定しています。

(総合学術博物館)

附属図書館・豊中市教育委員会共催「高齢化社会と医療」シンポジウム開催

附属図書館は、市民を対象に、「高齢化社会と医療」に関するシンポジウムを11月26日(日)に開催しました。このシンポジウムは、図書館の中期目標に掲げる地域貢献の一環として、地元である豊中市教育委員会との共催により実施したものです。

関心度が高まっている生活習慣病について、大学の専門



中村館長の講演

の研究者が分かりやすく解説することにより、予防と早期発見を目指すための指針を提示するタイムリーな企画で、中村仁信附属図書館長(医・放射線医学)による「癌の予防と早期発見」及び医学系研究科の前田和久講師による「メタボリックシンドロームと癌を予防するハーバード式ダイエットについて」の講演と、図書館が所蔵する講演内容に関連した学術的資料の展示が行われました。

講演では、パワーポイントを使用するなど参加者が理解しやすいように工夫され、最先端医療機器PETなどを用いた診断などについても説明されました。講演後は質疑応答の時間を設け、ダイエットの方法や癌の進行についてなど参加者より熱心な質問が展開されました。

また、展示では、市民が目にすることが少ないメタボリックシンドロームに関する資料などについてやさしく解説され、手に触れられるコーナーを設置して市民の関心を引き、更に大学図書館の利用についても分かりやすく説明を行いました。

(附属図書館)

知的財産セミナー開催

知的財産本部は、11月27日(火)に特許庁及び近畿経済産業局との共催で「大学の教育・研究活動から生じる知的財産と守秘義務に関する注意点(学生・教員及び大学の立場から)」を題材に知的財産セミナーを開催しました。

セミナーでは、弁護士法人淀屋橋・山上合同の藤川義人弁護士・弁理士から事例等を挙げながら講義が行われました。学生を中心とする参加者およそ30名が積極的に意見及び質問等を講師に投げかけ、議論が交わされました。セミナー終了後も熱心な参加者たちが、次々と質問をしていました。

共同研究を通して学生が企業と接する機会が増えており、また、教育の場面でも、産学の連携が深まりつつある今、参加者の関心が高いセミナーとなりました。

(知的財産本部)



基礎工学部技術職員研修(第13回)実施

基礎工学部は、「基礎工学部技術職員研修(第13回)」を11月28日(火)に基礎工学部会議室において行いました。

この研修は、教室系技術職員に対し、大学における技術



職務全般についての視野を広げ、資質と技術の向上を図ることを目的に実施したものであり、研修には基礎工学部をはじめ、大学院情報科学研究科、極限量子科学研究センター、太陽エネルギー化学研究センターから計14名の技術職員が参加しました。

当日は、西田正吾学部長による開講式に始まり、続いて大学院基礎工学研究科の金田清臣教授の特別講演「グリーンサステナブルケミストリーと触媒」、大学院生命機能研究科の中岡保夫助教授の特別講演「ソウリムシの環境適応」が行われました。午後からは受講者による技術発表が行われ、活発に意見交換がなされました。最後に、宮崎文夫研修実行委員会委員長から修了証書の授与が行われ、研修を無事修了いたしました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

「近隣地域の皆様をお招きしてのコンサート」開催

大阪大学の音楽系の公認課外活動団体による「近隣地域の皆様をお招きしてのコンサート」が本年度から開始されました。

この趣旨は、本学の理念である「地域に生き世界に伸びる」に基づき、本学学生が地域の皆様への感謝を具体的な行動で示し、地域に生きていく精神をより高めようとする初めての試みです。

大学側の趣旨に呼応し、トップをきったのが幾人ものプロ音楽家を輩出した「アカペラサークル inspiritualvoices」が、10月13日(金)午後6時30分から約1時間半にわたって、「アカペラライブ」が、カフェ&レストラン「宙(sora)」(学生交流棟1階)を会場として開催されました。

第二弾として、11月30日(木)に「大阪大学交響楽団」のメンバー約20名の「アンサンブルコンサート」が、10月13日と同じ開演時間で開催されました。

いずれのコンサートも大勢の観客で埋まり、コーヒーなどを片手に生の音楽に触れるひとときを楽しんでいただきました。ケーブルテレビによる第1回のニュースの報道効果もあってか、第2回の観客には、多くの子供さんも来られて、親子で楽しんでいただきました。

コンサート終了後も、学生に質問する熱心な方や、大学側に丁寧にご挨拶をしてくださる方もおられました。地域の皆様に大学の施設や彼らの活動を知っていただき、学生



アカペラライブ



アンサンブルコンサート

等との交流のおおきな場となりました。

次回は来年度となり、「吹奏楽団」から開始の予定です。
(学生部学生支援課)

平成18年度近畿地区国立大学法人等施設系職員研修開催

平成18年度近畿地区国立大学法人等施設系職員研修が11月30日(木)に本学の当番で国立大学協会近畿地区支部との共催により本学中之島センターで開催されました。

本研修は45才未満の係長職以下にある者を対象に、技術的な専門知識のみならず、大学行政全般についての資質の向上を図ることを目的として、講義と事例発表を進めら



講義を行う大谷晃一施設部長

れ、約80名が受講しました。

講義は 大学等職員としてどのような問題意識を持ち、どのように行動するのか、技術のみではなく財務会計を知る必要がある、施設系職員と地域連携の関わりなど専門技術的な話題にとどまらず、幅広い内容の講義が行われ、受講生からは、日常業務ではあまり携わることのないテーマもあり、大変新鮮で、今後の日常業務を新しい視点・考え方で取り組めるとの声がありました。

事例発表では、受講生自らの進行、発表により各大学等の施設マネジメントへの取り組みが具体的に発表されました。受講生にとって大いに参考となる事例も多数紹介され、質疑応答も活発に行われました。

日常業務を離れ本研修を受講したことによって、施設系職員として今後どのように業務を担っていくかを考える良い機会となり、非常に有意義であったとの感想も寄せられました。

(施設部企画課)

大阪大学と国立成功大学(台湾)が大学間学術交流協定締結

11月30日(木)に台湾・台南市の国立成功大学(<http://www.ncku.edu.tw>)において、大阪大学と成功大学との大学間学術交流協定が締結されました。調印式は、本協定のコンタクトパーソンの一人である荻原 哲教授(大学院理学研究科)が宮原秀夫総長署名の協定書を持参し、成功大学からは高強学長、黄肇瑞工学部教授、李碧雪医学部教授、許斐菊氏が出席して行われました。

成功大学の概要や、大阪大学との交流の歴史については、本号の「交流協定大学紹介」(56ページ)をごらんください。

(研究推進・国際部国際交流課)



協定を交換する荻原教授(左)と高強学長(右)

文部科学省結城事務次官が本学を視察

文部科学省の結城章夫事務次官が、11月30日(木)に、本学を視察し、宮原秀夫総長、理事らと懇談を行いました。

懇談では、平成19年10月に予定されている大阪外国語大学との統合計画について意見交換が行われ、統合によって、大阪大学の掲げる三つの教育目標(「教養」・「デザイン力」・「国際性」)が達成され、グローバル化の中で真に必要とされる能力を備えた人材を養成するとともに、国際化の中で大阪大学が要請される役割を果たすものであることや、「両学間のキャンパスの位置関係と周辺の教育・研究施設状況」、「統合の概要とメリット」、「学生数の移行」、「学生の教育」、「両学における協議の進捗状況」などにつ



宮原総長、鷲田清一理事・副学長と懇談する結城次官(左)



銀杏会館前での記念撮影

いての説明が行われました。

また、当日は、文部科学省から両大学に対して、新大阪大学の設置計画を可とする通知があったその日であり、宮原総長からは、本件に対する謝意とともに、「将来性を考え、両学で協議・検討しながら、再編統合に向けて前進するよう鋭意努力する」旨の統合に向けて取り組んでいく決意が表明されました。結城次官からは、「今後とも統合に向けて御尽力いただきたい」と激励の言葉がありました。

結城次官は翌日には、大阪外国語大学並びに本学豊中キャンパスも視察しました。

(総務部総務課)

セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修実施

12月1日(金)、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修がコンベンションセンター研修室において実施されました。この研修は、今年度において、新任の部局長、専攻長、学科長、事務(部)長、課長、補佐、技師長、看



護師長及び新任の教授等の新たに監督者となった教職員及びセクシュアル・ハラスメント防止等に関する部局委員会委員に対して、セクシュアル・ハラスメントの防止等に関し、その求められる役割について理解を深めることを目的としたもので、40名が参加して実施されました。

人権問題委員会委員長の白旗慎吾教授(大学院基礎工学研究科)からの挨拶の後、大学院人間科学研究科の木村涼子助教授から「キャンパス・セクシュアル・ハラスメント防止対策と学習環境の整備」と題する講演が行われました。

講演では、大学におけるセクシュアル・ハラスメント防止対策の現状と課題並びにカナダのトロント大学及びヨーク大学の取り組みの状況等について、具体的な例を交えて説明がありました。

受講者は熱心にメモを取り、最後に活発な質疑応答が行われ、好評のうちに修了しました。

(総務部人事課)

附属図書館本館で石橋中学校生徒が職場体験

附属図書館では毎年、社会貢献、地域貢献の一環として地元中学校生徒の職場体験に協力しています。今年も12月1日(金)に石橋中学校の生徒2名が本館において職場体験を行いました。2人は附属図書館の概要について説明を受け、館内を見学した後、カウンターでの貸出・返却業務の実習、返却図書配架作業、図書資料の目録作成業務実習などを図書館職員の指導を受けながら行いました。最初は緊張感でしたが次第に慣れてくると笑顔が浮かべながら業務を行えるようになり、初めての大学図書館の大きさと蔵書数の多さに驚きながらも熱心に職員の指導に従っていました。2人とも本が好きということで、今回の図書館での実習は大変楽しく貴重な体験になったとの感想を寄せいただきました。

(附属図書館)



カウンターでの実習体験(右の二人)

理学研究科外国人留学生懇親パーティー開催

平成18年度理学研究科外国人留学生懇親パーティーが、12月1日(金)、豊中キャンパスの福利センターにおいて開催されました。

パーティーは、菊池和徳留学生担当教員の司会のもと、金澤 浩評議員が小谷眞一研究科長の挨拶文を代読し、丸山 進豊中ロータリークラブ国際奉仕委員長長の挨拶に続き、則末尚志副研究科長の発声による乾杯で始められました。

本年も国際交流活動の盛んな地域クラブからの参加を得て、外国人研究者、指導教員、チューター学生及び国際交流に理解のある教職員・学生78名が参加して、留学生にとって日頃接することの少ない方々とも懇談する良い機会となりました。

留学生を代表して、アポストロフ・ロセン・パブロフさん(D3・ブルガリア)が謝辞を述べ、このあと留学生、外国人研究員のユーモアを交えた自己紹介に会場は大いに湧きました。また、恒例のピンゴゲームによるプレゼントの抽選会では、学内の国際交流支援サークルBSPメンバ



研究科長の挨拶文を代読する金澤評議員

ーの学生が進行し、例年同様盛り上がりを見せ、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深め、盛会のうちに閉会となりました。

(大学院理学研究科・理学部)

平成18年度リーダーズ・アセンブリー(L.A.)開催

本年度のL.A.は、12月2日(土)から1泊2日の日程で、学生99名及び教職員8名の参加により、ユニットピアささやま(篠山市)において開催されました。

本研修の目的は、体育系学内学生団体のリーダーである主将・主務等が一堂に会し、課外体育活動の意義及び諸問題を検討するとともに、講演及び講習等を通して、リーダーシップの向上及び課外活動の活性化を図り、加えてお互いの理解・親睦を深めることにあります。

昨年度の本会において、宮原秀夫総長から示された、七



大戦の主管校となる今年度の総合優勝と総長の胴上げの意向に応じて、見事に14年ぶりの総合優勝を果たした学生たちの気持ちはこの日の天候と同じく晴れやかでした。宮原総長は外国出張と重なり、ともに喜ぶ機会のひとつが消えたのは残念でしたが、宮原総長からの心温まるメッセージが大和谷 厚学生生活委員長から読み上げられると会場は大きな拍手につつまれ、各クラブの決意表明では、七大会の連覇を誓うクラブが続出しました。

昨年度から開始したモチベーションを中心とした企業の講師による講演は、「リーダーとしての自己理解、組織の課題解決例」を演題に、演習を含めて行われ、講演内容は翌日の分科会の議論に反映されました。

篠山市消防本部の協力を得て毎年工夫を加えて実施している救命救急については、本年度は、限定された場面設定での応急措置を学生に実際に考えてやってもらい、その是非を問う形で進行し、2005年に改訂された「心肺蘇生法」について新旧両方の実技指導もありました。

班別討議では、参加学生の活発な討議及び全体討議が行われ、学生から評価の高い合宿研修は今年度も盛会裡に終了しました。

(学生部学生支援課)

法学研究科・高等司法研究科産学連携プロジェクト平成18年度公開講義 「知的資産を活用した経営と法」開催

法学研究科附属法政実務連携センターと高等司法研究科は、毎年、社会貢献の一環として、社会、とりわけ産業界において関心の高い法学に関わる問題をテーマとした公開講義を行っており、今年度は、12月4日(月)に、本学中之島センターにおいて開催されました。

今年度の公開講義は、昨年度に引き続き、経済産業省の後援を受けて、「知的資産を活用した経営と法」をテーマ



パネルディスカッション

としました。グローバルな競争が激化する中で、知的な活動が介在して生み出される「知的資産」を活用した経営が注目されており、企業は国際競争力を確保するために、そのような経営を通して企業価値を高めることが要請されているからです。特許や著作権等の知的財産を経営に結びつける必要性は、一般的にも認識されているところですが、知的財産を含めた、知的資産を活用した経営という考え方は、知的財産経営を進化させたものということができます。

経済産業省・あずさ監査法人・株式会社滋賀富士通ソフトウェア・塩野義製薬株式会社から専門家を招へいし、講演及びパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは、パネラー間、受講者とパネラー間で活発な議論が行われましたが、その議論は知的資産をめぐる具体的な論点を対象としたもので、昨年度の公開講義から1年間の、知的資産を活用した経営という考え方の発展を強く印象づけるものでした。社会人や学生など約50名が受講し、今年度の公開講義も盛況のうちに終了しました。

(大学院法学研究科・法学部、大学院高等司法研究科)

2006年フランス留学フェア(工学系高等教育)開催

12月7日(木) 在日フランス大使館からの要請により、大学院工学研究科サントリー記念館メモリアルホールにおいて2006年フランス留学フェア(工学系高等教育)を開催しました。このフェアは、2004年以降毎年、在日フランス大使館が主催し、日本の大学生、教職員を対象に、フランスの高等教育、最新の研究動向のPR並びに大学間協定締結等による学生や教職員間の交流促進を目的として開催しているものです。

第3回目となる今回は、11月に芸術教育及びフランス語教育、12月に工学系教育と3つの分野にスポットを当て、工学系教育のフェアは12月4日から8日にかけて、東京、大阪、京都、仙台の4都市で本学を含め日本の大学の協力を得て開催されました。

フェア当日は、フランスの工学分野でトップレベルの大学8校とパリ工学系グランゼコール連合から学長、教授等の代表者が参加し、各校の教育と研究活動が紹介されまし



た。参加した約50名の学生・教職員は、熱心に耳を傾け、予定終了時刻を超える活発な質疑応答が行われるなど盛会のうちに無事終了しました。

(研究推進・国際部学生交流推進課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が、12月8日(金)にコンベンションセンター会議室で開催されました。本学では人権問題啓発行事の一環として、毎年7月及び12月に講演会を開催しており、12月は人権週間にちなみ開催しています。

今回は、関西大学外国語教育研究機構の熊谷明泰教授を講師に迎え、「朝鮮総督府の「国語常用」政策と朝鮮語使用の抑圧」と題して実施しました。

当日は、約60名の教職員・学生の参加があり、参加者は最後まで熱心に聴講し、大変盛況な講演会となりました。

(総務部総務課)



消防訓練実施



大学院薬学研究科・薬学部は秋季全国火災予防の一環として、12月8日(金)に学生・教職員あわせて約100名が参加して消防訓練を実施しました。

小比賀 聡助教授より「防災・防火に関する心構え、初期消火の必要性」について説明があった後、実際に薬学研究科内に設置されているABC粉末消火器、炭酸ガス消火器の2種類について、使用方法や使用上の注意が消火器販売業者より説明されました。

続いて、2種類の消火器を使った屋外での消火訓練が行われ、学生・教職員等の参加者が実際に消火器を使用し、模擬火災の消火を体験しました。この体験により、消火器の操作を確認し、消火器の特質を体感することができました。恒例の消火訓練でしたが、初めて参加した学生をはじめ、参加者各々に初期消火の大切さが認識されるとともに、火災予防への意識の高揚が図れました。

(大学院薬学研究科・薬学部)

大学院理学研究科・理学部は、11月29日(水)に豊中市北消防署の指導の下、総合的な消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、熱感知器発報による模擬火災と初期消火・避難訓練、119番および防災本部への通報訓練、模擬火災と粉末消火器・二酸化炭素消火器による消火器訓練、煙発生器による煙体験、ビデオ「いのちを守る 福祉施設火災の初期対応」の上映、消防署員による講話をそれぞれ行いました。訓練参加者は教職員・学生等約350名でした。

この訓練は、従来から、秋季全国火災予防運動にちなみで行っているものであり、また、例年、化学科3年次学部学生に対する化学実験の授業の一環としても実施しているものです。

(大学院理学研究科・理学部)



総合学術博物館第5回企画展・公開シンポジウム「マチカネワニのいた時代」開催

総合学術博物館は、12月10日(日)と11日(月)の2日間、本学中之島センターにおいて第5回企画展・公開シンポジウム「マチカネワニのいた時代」を開催いたしました。

1964年5月に豊中キャンパス・理学部の建築現場から発掘されたマチカネワニは、日本で初めて発見されたワニ類の化石です。昨年、発掘から42年の歳月を経て、はじめてマチカネワニ化石骨格の完全記載論文が北海道大学の小林快次博士らにより出版されました。それを記念して、マチカネワニ化石の本物を一般公開するとともに、マチカネワニ研究に関わった第一線の研究者をゲストスピーカーとしてお招きし、マチカネワニを取り巻く自然環境について包括的かつ大変興味深い以下の講演を1日目にいただきました。

- ・「マチカネワニ発掘の思い出」
亀井節夫氏(京都大学名誉教授)
- ・「マチカネワニが生きていた40万年前の植生と環境」
百原 新氏(千葉大学)
- ・「マチカネワニの再研究」
小林快次氏(北海道大学)
- ・「大阪層群より産出したマチカネワニの古病理学的研究」
桂 嘉志浩氏(岐阜県博物館)
- ・「マチカネワニとともに生きた哺乳類とその環境」
富田幸光氏(国立科学博物館)



パネル討論の様子

講演に引き続き行われたパネル討論では、参加者からマチカネワニが生きていた時代について活発な意見が出され白熱した討論が行われました。

翌日行われたワークショップでは、小林、桂両先生の指導のもと、22名の参加者がワニ化石のスケッチなどに取り組みました。

比較的専門的なシンポジウムであったにもかかわらず、2日間で延べ580名の参加者があり、大変好評でした。

(総合学術博物館)

国際交流会館地域交流会開催

大阪大学国際交流会館地域交流会が、12月11日(月)に豊中キャンパスの「カフェテリアらぶおれ」で開催されました。

会には、来賓として在阪総領事館から6か国7名の領事・副領事をはじめ、地域支援団体の会長・支部長、自治会役員、市役所関係者、近隣小学校の校長・教諭、ボランティアグループの方々約40名が出席されました。学内からは、総長・副学長はじめ約40名、国際交流会館居住者約120名の、総勢約200名が参加しました。

最初に、国際交流会館館長の宮原秀夫総長から日頃国際交流会館を支援していただいているの方々へ感謝の挨拶があ



ベトナムの民族舞踊

り、続いて来賓の紹介がありました。また、法学研究科博士前期課程2年の張滄さんから在館者を代表しての挨拶があり、続いて駐大阪中華人民共和国総領事館の游衣明領事から乾杯の発声がありました。恒例となった在館者等による民族舞踊・演奏の披露では、モンゴルからの留学生のホトランガさんによる馬頭琴演奏、ミャンマーからの留学生のテテさんと特別出演のキンさんによる民族舞踊、インドネシアからの留学生のウィディヤニタ・ユスフさんによる民謡が披露されました。最後に、ベトナムからの留学生のハイさん、カオさん、タオさんをはじめとする総勢15名の方々による民族舞踊が行われ、他の出席者も一緒に踊るなど友好的な盛り上がりを見せました。

会場では、来賓の方々や在館者と本学関係者の懇談の輪があちらこちらにでき、和やかな雰囲気にもまれた交流会となりました。また様々な種類の料理が用意され、鯛の尾頭付きを珍しそうに眺める留学生、料理に何が入っているかを聞いている留学生など、料理を中心に楽しい会話も繰り広げられていました。在館者からは、日頃はなかなか接することができない自国の領事や総長はじめ大阪大学の役員と話すことができ、貴重な時間を過ごすことができたとの感想が多く聞かれました。

(研究推進・国際部国際交流課)

基礎工学研究科・基礎工学部外国人留学生年末交流パーティー開催

平成18年度基礎工学研究科・基礎工学部留学生年末交流パーティーが、12月14日(木)に福利センター4階食堂(豊中地区)において、約180名の参加者のもと、盛大に開催されました。



感謝状の贈呈

本パーティーは、日頃お世話になっている地域ボランティア団体・個人、家主、ホストファミリーに感謝するとともに、留学生、留学生会学生、チューター学生及び教職員の親睦を深め、相互交流の輪を広げることを目的に、毎年基礎工学部留学生相談室を中心に催されているものです。

パーティーは、熊谷悦生留学生相談室主任の司会のもと、西田正吾基礎工学研究科長の挨拶、来賓である豊中ロータリークラブの紹介と挨拶に続き久保井亮一留学生相談室長の発声による乾杯で華やかに始まりました。本年も、留学生相談室の各種事業に貢献した学生やホストファミリーをしていただいた地域ボランティアの方に対して、感謝状の贈呈が行われました。

パーティーの途中でトルコからの留学生がトルコの伝統楽器を弾く場面もあり、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深めました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

駐日ドイツ連邦共和国大使一行来訪

12月18日(月)、駐日ドイツ連邦共和国大使ハンス＝ヨアヒム・デア氏ほか一行3名が本学を表敬訪問し、中之島センターにおいて宮原秀夫総長との懇談が行われました。

懇談では、本学が積極的に推進しているドイツの大学との研究者交流等に対し、デア大使から謝辞が述べられ、その後、大学間交流協定の状況、産学連携等について懇談が行われました。

(研究推進・国際部国際交流課)



宮原総長と懇談するデア大使(左から2人目)

附属図書館でクリスマスコンサート開催 ～約100名が聖夜を彩る歌声に魅了される～

附属図書館は、12月20日(水)図書館ホールでクリスマスコンサートを開催しました。

これは、附属図書館の初めての試みとして、日常の図書館サービスとは違う形で利用者へアプローチしてみようと、図書館若手スタッフの有志を中心になんとか開催までこぎつけたもので、関西を中心に活動しているシンガーの聖雪(セレ)さんをお招きし、学内外より100名を超える参加者がありました。

職員手づくりのクリスマスムードあふれる会場で、ホールの窓から六甲山方面に沈む夕日がきれいにみえる頃に始まったコンサートは、聖雪さんがクリスマスソングとオリジナル作品をしっかりと1時間半にわたって歌いあげました。途中、図書館職員からの利用者の方々へのクリスマスプレゼントとして「赤鼻のトナカイ」の合唱も盛り込まれ、参加者からは「レポート作成中の良い息抜きになった」「図書館でクリスマスコンサートが楽しめるなんて、また楽しい企画をしてほしい」という喜びの声も聞かれ、少し早いクリスマスの雰囲気を楽しんでいただく企画となりました。

(附属図書館)



歯学部附属病院で第7回年末ふれ愛コンサート開催

入院患者の方々にはやすらぎのひとときを過ごしていただくために、毎年開催している「大阪大学歯学部附属病院：年末ふれ愛コンサート」が12月22日(金)に開催されました。



7回目となる本コンサートは、今回も待合ホールで開催され、医師や看護師に付き添われた患者、家族、見学者が開催前よりつめかけ、熱気に満ちたステージとなりました。MIDI、ハンドベル、ピアノ、フルート、コーラス、独唱、サクソによるクリスマスソングから映画主題歌、最近のヒット曲、クラシックまで幅広いジャンルの演奏や迫力のあるコミカルなダンスが医師や病院職員によって繰り広げられ、どの出し物に対しても、鳴りやまぬ拍手がありました。最後にフルートとピアノ伴奏にあわせて出演者や患者、見学者全員が「見上げてごらん夜の星を」を斉唱し、患者、病院職員、見学者一同が楽しい一夜を過ごしました。

後日の患者の方からのアンケートには、「入院中で寂しかったが、コンサートに参加できて感動できたし、元気もらった」「心温まるとても楽しいコンサートでした」「心が和んだ」と感激の声が寄せられました。

(大学院歯学研究科・歯学部)

特色GP「8大学コアリッション」3拠点合同博士セミナー開催

大阪大学を含めた8大学9工学系研究科が推進している特色GP「8大学コアリッション」の関西3拠点（京都大学工学研究科と本学工学研究科、基礎工学研究科）は、12月22日（金）合同博士セミナーを豊中キャンパスの附属図書館ホール及び待兼山会館で開催しました。

企画運営を博士学生自身ですべて行うという、企画運営自体を研修課程とする特色ある形で実施され、3研究科から教員15名、博士学生50名以上の参加があり、盛会となりました。

当日は、東北大学の酒井聡樹助教授による特別講演「これから論文を書く若者のために」から始まり、その後は6つのグループに分かれ研究プロジェクト立案のグループワークとそのプレゼンテーションを行いました。懇親会では優秀賞の表彰を行い、3研究科の学生・教員が相互交流を行いました。

日頃研究室に閉じこもりがちな博士学生が、大学、研究科、研究分野の垣根を越え、熱く話し合ったことで、本



グループワーク

学が教育目標に掲げているデザイン力、コミュニケーション力が実践的に養われたと、参加者全員から好評を受け、和やかなうちに閉会しました。

（大学院工学研究科、大学院基礎工学研究科）

平成18年度ビデオ英語・英会話研修実施

本学の国際交流が活発化するなか、外国人教師・研究員・留学生等の受け入れ関係事務の増加に伴い英語を使用する機会がますます増え、その対応ができる職員の育成をねらいとして、平成18年度のビデオ英語・英会話研修が9月5日（火）から12月26日（火）まで、計15回（1回2時間）にわたり、本学大学院文学研究科博士後期課程の足達賀代子さんを講師として、参加者6名により事務局会議室で行われました。

この研修は、実用英会話の中でも特に聴解力を修得を目的とするもので、基本会話の講義・演習及びアメリカのサンフランシスコ教育研究センター（大阪大学海外拠点）へ平成17年6月13日から平成18年9月30日まで常駐職員として勤務した研究推進・国際部国際交流課海外拠点支援係主任の辻敏彦さんによる海外研修体験談報告などを盛り込んだ総合的な語学学習方式で実施されました。

研修生は、4ヶ月にわたる同講師の熱心な指導と研修生



自身の努力によって、各人の英語能力も当初より格段に向上しました。

最終日の研修終了後、同会議室で閉講式が行われ、6名全員に同講師から英文の修了証書が授与されました。

（総務部人事課）

第3回大阪大学睡眠学談話会開催

1月10日(水)に第3回大阪大学睡眠学談話会が開催されました。この談話会は、本年度医学部附属病院に設置した睡眠医療センターを核に、基礎医学・社会医学も含む学際的な睡眠学研究拠点形成構想で発足し、第1回の大阪バイオサイエンス研究所理事長早石 修先生、第2回の米国ス



タンフォード大学睡眠・サーカディアンリズム研究所所長西野精治先生に引き続き、今回は滋賀医科大学睡眠医学講座特任教授の大川匡子先生に、「概日リズム睡眠障害 最近の動向」をご講演いただきました。

大川先生は、これまで一貫して睡眠医学の臨床研究に従事され、光療法と薬物療法の単独あるいは併用により、睡眠リズム障害の大幅な改善が認められることを多数の臨床症例により明らかにされました。

講演では約100名の聴衆を前に、睡眠リズム障害の原因、臨床病型、治療法、特に光療法について分かりやすく詳細にお話いただきました。また、昼夜を問わない現代の産業社会、高齢化社会において、睡眠リズム障害の予防・治療の重要性が益々増大することを指摘されました。講演終了後、懇談の機会を持ち、先生の暖かいお人柄に触れ、参加者一同有意義な時間を過ごしました。

(大学院医学系研究科・医学部)

「“ 蛭びす男 ” 選り2007@阪大坂」開催

1月10日(水)、豊中キャンパスの阪大坂で、今年一番石橋で福のある男“蛭びす男”を決定する「“ 蛭びす男 ” 選り2007 @阪大坂」が開催されました。

このイベントは、今年一年の「石橋商店街の商売繁盛」と「地域・阪大のよりよい交流」を願って、石橋商店街を研究対象とする大学院経済学研究科の松村真宏研究室と石橋商店街が協力し実現したものです。石橋商店街は、阪大生にとって通学や生活で身近な商店街ですが、これまでお互い深くかかわることがありませんでした。阪大生との交流を望む石橋商店街の方々、阪大生のつながりが強まる



ことを願い企画されました。

当日は57名の参加者があり、午前7時30分にスタートの合図と同時に一斉に阪大坂を駆け上がる姿は壮観でした。その後に行われた参加者と商店街との交流会では、店主から参加者へ豚汁やおにぎりが振舞われ、商店街の商品やお買い物券などが当たる抽選会も行われました。

今回は交流の第一歩として大成功に終わることができたので、この機会を持続できるように恒例行事にすることや、様々な交流の機会を創り出していきたいと考えています。

(蛭びす男実行委員会)

第1回JUNBAアカデミアサミット・シンポジウム開催

1月11日(木)・12日(金)に、サンフランシスコ・ベイエリアに拠点を持つ大学・学術機関等のネットワーク、JUNBA (Japanese University Network in the Bay Area) が、その設立を記念した第1回アカデミアサミットとシンポジウムを開催しました。この取り組みは、日米双方のメディアにも取り上げられ反響を呼んでいます。

JUNBA (サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク) は、日本の大学の国際化、国際的人材の養成、



産学連携等の諸活動を支援し、日本及び米国における教育・研究の発展と、産業創出に寄与することを狙いとして形成されたものです。なお、JUNBA 会長には、室岡義勝サンフランシスコ教育研究センター長が就任しています。

11日のアカデミアサミットは、大阪大、鹿児島大、九州大、東北大、横浜市立大、法政大、慶応大、早稲田大の8大学から学長・総長、副学長、国際担当理事が出席し、各大学の国際交流戦略について紹介し、今後のJUNBAの活動方針について議論を行うとともに、その活動を支援するための基本方針をまとめました。本学からは、辻 毅一郎総長補佐が代表としてサミットに出席しました。

翌12日のシンポジウムは、ナノマテリアルサイエンスをテーマとして、スタンフォード大学内で開催され、本学の川合知二産業科学研究所長も講演を行いました。材料、生物学、工学にまたがる最新の研究成果の発信を目的とした今回のシンポジウムには、一般の参加者を含め約170名が参加し、日米幅広い参加者の交流が行われました。

JUNBA : <http://www.junba.org/>

(サンフランシスコ教育研究センター)

「生涯生活設計セミナー(退職準備セミナー)」開催

1月16日(火)に、文部科学省共済組合・大阪大学主催、大阪教育大学・大阪外国語大学・和歌山大学・国立民族学博物館・和歌山工業高等専門学校共催による平成18年度「生涯生活設計セミナー」がコンベンションセンターで開催されました。

このセミナーは、定年退職を間近に控えた国立学校等の教職員並びにその配偶者を対象に行われたもので、教職員の退職に当たっての心構えや退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基礎づくりに役立ててもらうことをねらいとして開催されたもので、今年度は117名の参加者があり、退職後の生活について関心の高さをうかがわせました。

当日、本学佐々木順司理事・事務局長の開会挨拶の後、退職後の生活設計を見つめる観点から、充実したプログラムの講義が行われました。

・「退職共済年金等について」

(国家公務員共済組合連合会年金部給付第一課
阿部耕二課長代理)

・「退職後の生活設計等について(総論)」

(木曾教育研究所 山田能通主任研究員)



阿部課長代理

・「充実したセカンドライフのために

- 自己責任時代の資産運用 - 」

(住友信託銀行 山内 健本店支配人)

・「退職後の所得税の知識について」

(吹田税務署個人課税第一部門 上東裕典上席国税調査官)

・「退職後の健康管理について」

(本学保健センター 守山敏樹センター長)

・「退職後の医療保険制度等について」

(本学総務部人事課 檜 正次郎職員第二係長)

(総務部人事課)

第8回理学懇話会開催

理学研究科は、1月18日(木)、千里阪急ホテルにおいて、「第8回理学懇話会」を開催しました。本懇話会は、企業等の幹部として活躍中の理学研究科・理学部卒業の方々に委員として参加していただき意見交換等を行うもので、今年は17名の委員及び本研究科の教員25名が出席しました。

懇話会の席上では、本研究科の2名の教授から最新の研究についてそれぞれ紹介があり、続いて「日本と米国における大学教育」と題し高エネルギー加速器研究機構J-PARC センター長・永宮正治氏にご講演いただきました。会の後半には「理学研究科の教育の国際化について」、小谷眞一研究科長、大貫惇陸教授及び荻原 哲教授から報告、説明が行われました。

また、意見交換の中では、活発な提言が行われ、今後の本研究科の教育・研究運営に係る助言等をいただき、大変有意義な会となりました。引き続き行われた懇親会では、



永宮氏の講演

和やかな雰囲気の中、いつまでも話が尽きませんでした。
(大学院理学研究科・理学部)

留学生教育・支援協議会(兼:国立大学法人留学生指導研究協議会)開催

1月19日(金)、豊中市の千里朝日阪急ビルにおいて「第28回大阪大学留学生教育・支援協議会(兼:平成18年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会)」を開催しました。

この協議会は、全国の留学生センター等において日頃留

学生に対して教育・研究指導に携わる教職員が参加し、共通する課題解決のため意見交換等を行い、さらなる受入れ体制の整備充実並びに連携強化を図ることを目的として毎年開催しているものです。

当日、44機関から50名の教職員及び学内関係者26名の併せて76名が出席し、今回は「留学生のメンタルケアとサポート」を主題テーマとして討論が行われました。

最初に本学の古城紀雄留学生センター長から挨拶があり、その後文部科学省高等教育局学生支援課池田輝司留学生交流室長による「これからの留学生交流のあり方 来年度予算にみる留学生交流施策の課題」と題する講演をはじめ、京都教育大学教育実践総合センター本間友巳教授の「大学における心理臨床的支援 - 心理相談から感じること -」、金沢大学留学生センター八重澤美知子教授の「留学生のメンタルケアとサポート」の講演、また、本学留学生センター有川友子助教授からの「最近の留学生相談の内容と対応事例」の紹介もあり、活発な意見交換、討論が行われました。会議終了後には、懇談会も開催され盛会のうちに無事閉会しました。

(研究推進・国際部学生交流推進課)



池田室長の講演

平成19年度大学入試センター試験実施

平成19年度大学入試センター試験が、1月20日(土)・21日(日)の両日、全国735試験会場で一斉に実施され、本学では、豊中、吹田の両キャンパス、大阪青山大学及び千里金蘭大学の10試験場において実施されました。

今年の志願者総数は、全国で553,352人、本学では4,201

人の志願者が受験しました。

英語リスニングテストでは、ICプレーヤー等の不具合などによる再開テストが本学でも2試験場で実施されましたが、無事終了しました。

(学生部入試課)

平成18年度国大協近畿地区支部専門分野別「広報研修」実施

1月24日(水)に平成18年度国大協近畿地区支部専門分野別「広報研修」を実施しました。

この研修は、国大協と大阪大学の共催で、近畿地区の国立大学法人等の事務職員を対象に、広報マネジメント能力の向上を図ることを目的として実施したもので、各大学から約90名が受講しました。

今回は、朝日新聞社大学ランキング編集総括 小林哲夫氏と慶應義塾広報室長 大久保栄一氏を講師に迎え、小林



大久保講師



小林講師

講師からは「事件、事故が起きたときの広報対応」と題し、JR福知山線事故の際の具体的な大学の対応例等をもとに講義が行われ、また、大久保講師からは「慶應義塾における広報戦略」と題し、慶應義塾が取り組んでいる広報戦略の実例を挙げながらの講義が行われました。

講義終了後には活発な質疑応答が行われるなど、有意義な研修となりました。

(総務部人事課、評価・広報課)

第2回安心と安全のための教育シンポジウム開催

1月30日(火)、医学部銀杏会館において、第2回安心と安全のための教育シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、工学研究科主催・安全衛生管理部共催で、昨年度に引き続き実施しているもので、今回で2回目となりました。

当日は、各発表者と会場の参加者が一体となり、どのようにすれば大学構成員の安全意識を高め、安全で安心できる教育研究環境を実現できるのかについて、活発な議論が行われました。シンポジウムの講演要旨は、下記URLに掲載されていますので、ぜひご覧ください。

シンポジウム講演要旨：<http://www.bio.eng.osaka-u.ac.jp/ps/safety2/main.html>

(大学院工学研究科・工学部、安全衛生管理部)



総合討論の様子

金水 敏教授「第25回新村出賞」受賞

毎年1回、すぐれた言語学・国語学の業績に対して与えられる「新村出賞」(財団法人新村出記念財団)に、今年度は大学院文学研究科国文学・東洋文学講座(国語学)の金水 敏教授が選ばれ、11月26日(日)に京大会館で贈呈式が行われました。

新村出記念財団は、言語学者で京都大学名誉教授でもあり、『広辞苑』の編纂者として知られる新村 出博士の遺稿や収集資料等を整理・公開する目的で1981年に設立された財団法人で、重山(新村出の号)文庫の管理運営及び国語学・言語学に関する図書・資料の収集、国語学・言語学に係る調査・研究の助成及び表彰(新村出賞・研究助成金)などを主たる事業としています。新村出賞は、今年度で第25回目にあたります。

日本語固有の存在動詞「いる」「おる」「ある」の意味、構文、用法等を、理論的・歴史的・地理的観点から調査・検討し系統づけた金水教授の著作『日本語存在表現の歴史』(ひつじ書房、2006年刊)に対してこの賞が贈られたものです。国文学・東洋文学講座では1998年の蜂矢真郷教授に続いて、また本学としては2005年の由本陽子助教授(言語文化研究科)に続いての受賞となりました。

(大学院文学研究科・文学部)



最前列右から6人目が金水教授

田村進一教授「電子情報通信学会フェロー称号」受賞

大学院医学系研究科の田村進一教授が、電子情報通信学会から「電子情報通信学会フェロー」の称号を授与されました。

このフェロー制度は「学問・技術または関連する事業に関して顕著な貢献が認められ、電子情報通信学会への貢献が大きい正員に対し、フェローの称号を贈呈する」もので、1999年10月から始まっています。受賞理由は「画像解析技術と医学応用に関する研究と教育への貢献」です。

贈呈式は12月4日(月)に機械振興会館(東京都港区)で行われ、電子情報通信学会の伊澤達夫会長より学会としての謝意と祝辞がのべられるとともに、継続しての貢献をお願いするとの挨拶がありました。挨拶に続いて、各受賞者に対してフェロー称号賞状とフェローバッジが贈呈されました。

(大学院医学系研究科・医学部)



松田直紀君「びわ湖大学駅伝ナジック写真コンテスト ナジック賞」受賞

法学部4年生の松田直紀君が「びわ湖大学駅伝ナジック写真コンテスト ナジック賞（優秀賞）」を受賞しました。

この賞は、昨年11月18日に滋賀県琵琶湖最北の西浅井町から大津・膳所城跡公園にたどり着く8区間83.4キロでレースが行われた『びわ湖大学駅伝』を題材に、学生情報センター（ナジック）が特別協賛し、読売新聞大阪本社の学生向け会員制サークル「読売キャンパス・ランサーズ」（愛称ヨミティ）会員から募った「びわ湖大学駅伝ナジック写真コンテスト」に応募のあった34点から優秀な作品に贈られるもので、今年度はナジックと読売新聞社からそれぞれ最優秀賞1名、優秀賞3名が選ばれています。

受賞は、「びわ湖大学駅伝」を裏方で支えているボランティアスタッフの活躍を撮影した作品が評価されたものです。

表彰は、1月15日（月）本学学生部長室で行われました。

（学生部学生支援課）



受賞作品「駅伝の陰の盛り上げ役」



表彰を受ける松田君（右）

佐々木儀広君、徳永美和子さん 日本学生支援機構 平成18年度「優秀学生顕彰事業」奨励賞受賞

1月17日（水）に日本学生支援機構 平成18年度「優秀学生顕彰事業」の表彰式が総長室において実施されました。

この優秀学生顕彰事業は、経済的理由により修学に困難がありつつも、学術、文化芸術、スポーツ活動、社会貢献活動の4分野において優れた業績を挙げた学生を顕彰し、これら活動の一層の促進を奨励・援助し、21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的として日本学生支援機構により平成17年度に創設されたものです。

本学からは、学術分野で経済学部4年生の佐々木儀広君、スポーツ活動分野で工学部4年生の徳永美和子さんの2名を推薦し、それぞれ奨励賞を受賞しました。佐々木君は知能情報ファジィ学会誌に掲載された学術論文等が評価され、また、徳永さんは課外活動の少林寺拳法の国際大会女子二段の部で、工学部4年生の吉松聖菜さん、基礎工学部4年生の岡地理佳さんと3人の団体戦で1位になるなどの成績が評価されました。

当日は、本多佑三経済学部長、豊田政男工学部長、大和谷 厚学生生活委員長、関 昭裕学生部長の出席のもと、宮原秀夫総長から表彰状及び記念品が授与後、引き続き今後の活躍を祈念する旨の言葉が述べられました。

当日は、本多佑三経済学部長、豊田政男工学部長、大和谷 厚学生生活委員長、関 昭裕学生部長の出席のもと、宮原秀夫総長から表彰状及び記念品が授与後、引き続き今後の活躍を祈念する旨の言葉が述べられました。

（学生部学生支援課）



新教授紹介

SCHWENTKER WOLFGANG

(シュヴェントカー ヴォルフガング)

大学院人間科学研究科



所属：大学院人間科学研究科人間科学専攻
基礎人間科学講座
専門分野：文明動態学、比較思想史

【略歴】

- 昭54. 5 デュッセルドルフ大学卒業
- 54.11 デュッセルドルフ大学マックス・ヴェーバー全集研究所研究員
- 60. 3 歴史学博士（デュッセルドルフ大学）、ロンドン・ドイツ歴史研究所研究員
- 61. 2 デュッセルドルフ大学文学部近代歴史学研究室第2科研究助手
- 平元.10 立教大学経済学部客員研究員
- 3.10 オックスフォード大学セント・アントニース・カレッジ研究員
- 8.10 ハーゲン通信大学客員教授
- 11. 1 立教大学経済学部客員研究員
- 12. 4 ビーレフェルト大学客員研究員
- 12.10 エッセン大学非ヨーロッパ地域歴史学教授代行
- 14. 1 ウィーン大学文化学部社会経済史学科客員研究員
- 14.10 大阪大学助教授大学院人間科学研究科
- 19. 1 大阪大学教授大学院人間科学研究科

井上正志 (いのうえ ただし)

大学院理学研究科



所属：大学院理学研究科高分子科学専攻高分子物理化学講座
専門分野：高分子物理化学、レオロジー、流動光学

【略歴】

- 昭58. 3 京都大学工学部工業化学科卒業
- 60. 3 京都大学大学院工学研究科工業化学専攻修士課程修了
- 63. 3 京都大学大学院工学研究科工業化学博士後期課程専攻修了
- 63. 4 日本学術振興会特別研究員として京都大学工学部高分子化学教室にて研究に従事
- 平元. 4 京都大学助手化学研究所
- 15. 8 京都大学助教授化学研究所
- 19. 1 大阪大学教授大学院理学研究科

柿本辰男 (かきもと たつお)

大学院理学研究科



所属：大学院理学研究科生物科学専攻植物成長生理学講座
専門分野：植物生理学、植物分子生物学

【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学理学部生物学科卒業
- 61. 3 大阪大学大学院理学研究科生理学専攻博士前期課程修了
- 62. 3 大阪大学大学院理学研究科生理学専攻博士後期課程退学
- 62. 4 味の素株式会社中央研究所生物科学研究所研究職
- 平元. 9 大阪大学助手理学部
- 13. 4 大阪大学助教授大学院理学研究科
- 18.11 大阪大学教授大学院理学研究科

新教授紹介

久保孝史 (くぼ たかし)

大学院理学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 大阪大学理学部化学科卒業
- 5. 3 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士前期課程修了
- 8.12 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士後期課程修了
- 9. 4 三菱化学株式会社黒崎事業所技術開発センター
- 12. 7 大阪大学助手大学院理学研究科
- 18. 6 大阪大学助教授大学院理学研究科
- 18.12 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科化学専攻有機化学講座

専門分野：構造有機化学

藤井研一 (ふじい けんいち)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学理学部物理学科卒業
- 57. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻博士前期課程修了
- 60. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻博士後期課程修了
- 60.10 大阪大学助手教養部
- 平 6. 4 大阪大学助手理学部
- 11. 7 大阪大学助教授大学院理学研究科
- 19. 1 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科物理学専攻物性物理学講座

専門分野：半導体メソスコピック系の物理

東風西風

最近思うこと

元 田 浩



私は昨年3月に退職したばかりであり、しかも阪大に10年しかお世話にならなかったため、他人に披露できるような大阪大学にまつわるエピソードは持ち合わせていない。代わりに、最近強く思うことを3点取り上げてみたい。

第1点は日本社会の特異性である。私は企業の研究所に28年、大学の研究所に10年と、企業と大学とでは風土は異なるが、約40年間研究畑に身をおき、基礎研究から応用研究まで幅広く色々なことを体験してきた。退職に際し、私学に行くことは考えていなかった。なんらかの形で今までの経験が活かせるいい環境が見つからなければ、働くことを止め、数ヶ月ずつ違う国で生活する風来坊人生を送ろうと思っていた。ところが、運命とは皮肉なもので、米国国防総省空軍科学技術局の東京事務所からお誘いの声がかかり、そこで科学顧問として彼らの手伝いをするようになった。具体的には、私の専門に近い分野に関し、オーストラリア、インドを含むアジア地区の各国の基礎研究をフォローし、これはと思う研究者を発掘し、研究予算をつけ、研究の一層の促進をはかり、究極的には米軍ならびに世の中の利益に資する手伝いをするのであり、それ以外は自由で好きなことをしてよいというありがたい身分である。支援の対象としているのは基礎研究であり、成果の公表が前提、特許などの権利も主張せず、純粋に研究を支援することが目的である。一例を挙げると、制御分野でもはや古典となったカルマンフィルタは、この予算をもらった研究から生まれた成果である。軍にも貢献したが、一般産業にも大きく貢献した。この予算による研究で現在までに40名以上のノーベル賞受賞者を輩出している。この研究予算は、米国議会により基礎研究以外の使用が禁止されており、米国の懐の広さを感じさせる。現在、この予算の大半はアメリカ国内の大学に流れ、国外の大学に流れるのはほんの一部でしかない。これまで、日本、オーストラリア、韓国、シンガポール、インドなど幾つかの国の研究者と接触してきたが、日本以外は全く抵抗なく受け入れられ、積極的にプロポーザルを書いてくる。しかし、日本だけは別で、ほぼ間違いなく個人も組織も拒絶反応を示す。基礎研究とは言え軍から援助をもらうことには抵抗があるという気持ちは分からなくはないが、他国との格差が大きすぎる。この感情は常に正しいのであろうか。日本はこれでいいのであろうかという疑問を感じざるを得ない。数年かかって国内で年間十数件のプロジェクトを支援するに至っているが、多くの大学に浸透させるのは至難の業である。幸い、大阪大学は産学連携室、知的財産本部の理解があり、大学として資金援助の受入れを認めてくれた数少ない大学の一つである。

第2点は国際学会に生じた異変である。阪大在職中も多くの国際会議の運営に関係してきたが、現在は、国際会議に出席することが仕事の重要な一部になっている。他の分野でも同じではないかと想像するが、私の専門分野に関する国際会議では中国からの論文投稿が数年前から増加し始め、ここ2、3年驚異的に急増し、全体の半分以上を占めるに至っている。その結果、4、5年前に300件程度であった投稿数が700件にもなっており、これが種々の問題を起している。まず査読者の確保である。1論文を3人の査読者で読むとして、延べ2,100人、一人10件が限度としても200名を超える査読者が必要になってくる。質の悪いもの、内容が会議の趣旨にそぐわないものを最初にスクリーニングするなどの対策が必要になってくる。つぎにNo showの増加である。論文は採択され参加登録費は払い込んでいるのに学会に参加しない人が増加している。このうちの多くは最初から論文がProceedingsに掲載されることだけを目的にした確信犯である。SpringerのLecture Note seriesをProceedingsに採用する国際会議が増加したこと、これらがScience Citation Indexに登録されたこと、そして、SCIのお墨付きをもらった論文をジャーナル論文扱いし学位論文の取得資格条件にする大学（中国、韓国）が増加したことが原因である。さらにもっとも深刻なものが、他人の論文のコピーの増加である。背景記述などに他人の論文の文章を引用なしで盗用する軽微なものから、他人のアイデアそのものを盗用する重大なものまでモラルの低下が見られる。この種の論文を誤って採択すれば国際会議の名誉を失墜させてしまう。しかし、これらを査読段階で完全にチェックするのは非常に困難で、プログラム委員（長）に大きな挑戦状がたたきつけられている。ここで注意すべきは他人の論文に自分の過去の論文も含まれることである。同一研究室から出るシリーズものの論文で、学生が先輩の文章をコピーすることはよくある。不本意な指摘を受けないよう教員は襟を正し指導を徹底すべきである。

第3点は実体にそぐわない学位取得条件である。学位論文取得にはジャーナル論文が指定件数なければならない。非常に進展の早い情報分野においては、成果の公正な評価と迅速な公表が重要であり、これらを同時に成立させるには一流の国際会議で発表するのが一番である。上記の論文投稿数急増の問題が起きる以前から、一流の国際会議の論文採択率は20%以下であり、採択された論文は世界中の研究者から評価される。ジャーナル論文も重要であるが、権威ある雑誌の場合、最初の採否の連絡があるまで1年以上、修正、再査読の過程を経ると採録通知を受け取るまで2年くらいかかることがある。採録されたときには周知の事実になっており学会に対する新たな貢献にはならない。そのため、学位取得条件を満たすために海外研究者には読めない採択されやすい日本語の論文誌に投稿するという安易な方策を取るようになる。最近では質の高い電子ジャーナルも普及し始めている。ジャーナル論文を条件にすることは、第一審査を他人に委ねているとも考えられる。ジャーナル論文の存否に関係なく、審査委員会の見識により審査すべきとの見方もあろう。昔からの慣習に従うのではなく、実体に則した審査基準を考えてもいい時期に来ているのではなかろうか。

尾崎 弘名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授尾崎 弘先生は、平成 18 年 11 月 20 日(月)、急性心不全のため逝去されました。享年 86 歳でした。

先生は、昭和 17 年大阪帝国大学工学部通信工学科を卒業、技術科士官として海軍に服役後、昭和 22 年大阪帝国大学工学部助手となり、大阪大学工学部助手、同講師、同助教授を経て、昭和 37 年同教授に就任し、電子工学科演算電子工学講座を担当され、昭和 58 年に停年退官された後は、関西大学教授として、平成 2 年まで教鞭を執られました。

回路理論、グラフ理論、論理回路理論の研究においては揺籃期から常に先導的役割を果たされ、なかでも、先生が開拓された回路網構成理論は、現在でも相互誘導を用いな

い回路構成の分野においては最高の位置にあります。また、世界に先駆けて提案された多変数正実関数理論は大きな注目を浴び、以後内外の多数の学者によって研究されるとともに、実用においても、集中定数素子および分布定数素子の混在系の設計に応用されています。これらの研究に対して電子通信学会(現電子情報通信学会)より論文賞並びに業績賞を受け、また、米国電子工学会(IEEE)より、回路とシステム・ソサイエティ Golden Jubilee Medal ならびにフェローの称号を得ています。

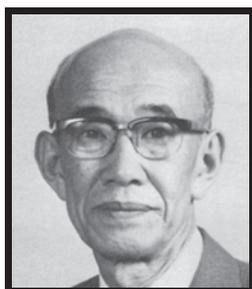
一方で、産業界においては、電卓、自動改札機、集積回路をはじめとする情報機器の研究開発にその誕生期から大きく関与されるなど、情報産業の振興に努め、その発展に多大の貢献を果たされています。マルコーニの無線通信機やボルタの乾電池など、全世界で 60 余りある IEEE マイルストーンの中で、わが国からは 7 件が認可され、そのうちの 2 件が先生の傑出した指導によって開発されていることは特筆すべき事項であります。

これらの永年にわたる研究・教育による我が国への貢献が評価され、平成 6 年度春の叙勲で勲三等旭日中綬章を受章されています。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科・工学部)

吉川彰一名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授吉川彰一先生は、平成 18 年 12 月 10 日(日)、慢性肺疾患のため逝去されました。享年 89 歳でした。

先生は、昭和 16 年大阪帝国大学工学部を卒業、陸軍燃料廠技術中尉、大尉を経て、昭和 20 年大阪帝国大学工学部実験囑託、昭和 22 年同助手に就任されました。昭和 28 年大阪大学工学部助教授、昭和 41 年同教授に昇任され、

応用化学科第三講座(石炭化学・石炭化学工業)を担当されました。昭和 56 年に停年退官されるまで、教育研究の傍ら工学部会計委員会委員長、定員問題委員会委員長など各種委員、委員長を歴任されました。退官後は、大阪工業大学教授として平成元年まで務められました。

専門分野では、大学に着任後、石炭乾留によって生成するタールピッチの有効利用研究を開始され、組成研究や水添分解研究などを通して芳香族ケミカルズの製造に関する新技術の開発に貴重な貢献をされました。また、教授就任後には、無機溶融塩存在下での有機化学反応という独創的な研究を展開されました。昭和 48 年の石油危機後、この方法を重質化石資源の分解に応用し、軽質成分への高い転換効率を達成され、その成果はエネルギー業界に大きな影響を与えました。これらの業績により、昭和 55 年に燃料協会賞、平成元年に同協会功績賞を受賞されております。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科・工学部)

丘本 正名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授丘本 正先生は、平成 18 年 12 月 14 日(木)肺炎のため逝去されました。享年 83 歳でした。

先生は、昭和 21 年 9 月東京大学理学部数学科を卒業、昭和 26 年 9 月大阪大学理学部大学院を修了後、昭和 29 年 3 月大阪大学理学部助手に採用されました。昭和 38 年 5 月

に大阪大学基礎工学部教授に昇任し、24 年間に亘り推計学講座を担当されました。この間、先生は教育・研究に情熱を傾けられ、専門とする数理統計学、特に多変量解析の分野において国内外の学界に多大の影響を及ぼすとともに、学界、教育界及び産業界に多数の優秀な人材を送り出し、数理統計学の発展と普及に大きく貢献されました。

学内においては、大阪大学評議員を始めとして多くの委員を歴任され、その温厚な人柄をもって学生指導、教育に尽力するとともに冷静的確な判断能力と優れた見識により大学運営にも大きく寄与されました。学界においては、国内では統計関連学会の理事や評議委員を歴任し、国外では国際統計計算学会会長、国際統計協会や国際計量心理学会の会員として活躍されました。

丘本先生はお亡くなりになる直前まで基礎工学部と数理教室、そして、講座を巣立った 30 余名の統計学者の将来を案じておられました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

荻原郡次名誉教授(教養部)逝去



本学名誉教授荻原郡次先生は、平成 19 年 1 月 19 日(金)腎不全のため逝去されました。享年 95 歳でした。

先生は、昭和 12 年 3 月大阪帝国大学医学部医学科を卒業し、同大学医学部副手、助手、昭和 21 年 9 月講師、同 23 年 3 月助教授を経て、同 26 年 8 月教授に昇任し、同 38 年 4 月から教養部勤務となり、同 50 年 3 月に停年退官されました。その後、大阪教育大学、私立甲子園大学で長く教授を務められ教育・研究に情熱を傾けてこられました。

在任中は、教授として保健体育、特に新制大学における新しい課題として体育生理学を開拓し、多くの優れた研究者の育成に努めるとともに、この学問分野が後の健康体育

部として発展する基礎を築かれました。また、単に学問上の問題としてではなく、成人及び学童における体力テストの標準化や、光化学スモッグの実態・予防に関する調査に分担者として協力するなど社会的要請にそって研究を行ってこられました。

先生は、保健体育の指導者として教室の発展に尽すかわら、大学運営にもひとかたならぬ努力を傾け、評議員、長期計画委員会委員、教養部審議会委員として大学に貢献され、大阪大学体育会の創立、発展に対する功績も大きく、体育会技術部長またテニス部長として指導にあたり、甲子園大学においても学生部長として学生の厚生補導に献身的努力を惜しみませんでした。

専門学会においては、その業績と人柄によって常に指導的役割りを果し、日本体育学会の設立に関与し、設立以来評議員であったほか、理事も務められました。また、日本体力医学会評議員、日本武道学会大阪支部長としてその発展に貢献してきました。

以上のように先生は、実験を重んずる研究者・教育者として生理学・保健体育学の発展と後進の育成に努め、体育における社会的関心を高めることに多大な貢献をされました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学教育実践センター)

「Annual Report of Osaka University - Academic Achievement - 2005-2006」刊行

部局の枠を越え、本学における研究成果を大学全体として一つの冊子で学外へ発信するアニュアルレポート〔英文研究年報〕2005 - 2006 を、このたび刊行しました。平成12年の創刊から今年で第7巻目となり、278編の応募論文の中から選ばれた10選及びグラフィックス24選を含む100編を掲載しています。本学の研究成果を学内外に発信する一手段として、広くご活用ください。

教員の方々にはすでに一部ずつ配布していますが、追加で配布を希望される場合は所属部局の事務部又は事務局研究推進・国際部国際交流課国際交流企画係（内線：3040）までお知らせください。なお、昨年度と同様、本学ホームページ上に掲載する予定です。

また、次巻の論文募集もまもなく行う予定です。詳細につきましては、所属部局を通じて通知及び本学ホームページ（学内専用）等でお知らせいたしますので、奮ってご応募ください。

（研究推進・国際部国際交流課）



平成18年度卒業式及び大学院学位記授与式のお知らせ

平成18年度卒業式及び大学院学位記授与式を下記のとおり挙ります。

卒業式

日時：平成19年3月23日（金）

10時20分～11時40分（9時30分 入場開始）

場所：〔卒業生〕大阪大学吹田地区体育館

〔同伴者〕大阪大学コンベンションセンター（映像配信）

総長主催学部・大学院合同祝賀会（雨天の場合は中止します）

日時：平成19年3月23日（金）11時50分～12時20分

場所：大阪大学吹田地区体育館前

大学院学位記授与式

日時：平成19年3月23日（金）

12時50分～14時00分（12時20分 入場開始）

場所：〔修了生〕大阪大学吹田地区体育館

〔同伴者〕大阪大学コンベンションセンター（映像配信）

〔それぞれ、開始15分前までに入場完了願います。遅刻された場合、式場への入場をお断りする場合がありますのでご注意ください。〕



同伴者の方は、吹田地区体育館に隣接するコンベンションセンターにおいて、卒業式及び大学院学位記授与式を映像でご覧いただくこととなりますので、予めご了解の程よろしくお願いたします。

車での来場はご遠慮下さい。

問い合わせ先 総務部総務課総務係 TEL：06 - 6879 - 7014

記念講義

平成19年3月31日限りで定年等で退職される教授の記念講義に関し、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局(講座・部門等)	氏名	日時・場所	講義題目
文学研究科 (文化表現論専攻芸術学講座)	大橋良介	3月24日(土) 15:00~ 大阪大学中之島センター	Tabula rasaの美学
理学研究科 (高分子科学専攻高分子構造・物性・機能論講座)	則末尚志	3月7日(水) 14:00~ 理学研究科 D501号室	私の高分子溶液研究40年 - 裏話や繰り言など -
工学研究科 (環境・エネルギー工学専攻共生エネルギーシステム学講座)	水野稔	3月1日(木) 15:00~16:30 工学研究科環境・エネルギー工学専攻 S4棟 111号室	都市代謝系エンジニアリングの変遷と課題
基礎工学研究科 (物質創成専攻化学工学領域反応化学工学講座)	金田清臣	3月9日(金) 14:30~16:00 基礎工学部 国際棟ディスプレイ室	グリーンケミストリーと触媒
超高压電子顕微鏡センター	鷹岡昭夫	3月16日(金) 13:30~14:30 医学部銀杏会館会議室 C	電子ビームと過ごした40年

平成19年度懐徳堂古典講座

基本コース ・ 中之島会場(大阪大学中之島センター 午後6:00~7:30)

- | | |
|--|------------------------|
| コース名 | (講師名) |
| No.1 飲酒/禁酒のアメリカ文学 | (大阪大学大学院文学研究科教授 森岡裕一) |
| No.2 源氏物語を読む | (大阪大学大学院文学研究科助教授 加藤洋介) |
| No.3 螺旋の回廊 幸田露伴を読む(2) | (大阪大学大学院文学研究科教授 柏木隆雄) |
| No.4 江戸時代の触留帳 <small>ふれどめちょう</small> を読む | (大阪大学大学院文学研究科教授 村田路人) |
| No.5 小津安二郎の映画を読む | (大阪大学大学院文学研究科教授 上倉庸敬) |
| ・ 梅田会場(新阪急ビル 午後6:00~7:30) | |
| No.6 中国の歴史から何を学ぶか | (桃山学院大学文学部教授 串田久治) |
| No.7 『論語』を読む | (中央大学文学部教授 岸田知子) |



集中コース ・ 中之島会場(大阪大学中之島センター) 第1回:8/4(土) 第2回:8/11(土) 第3回:8/25(土)

- | | | |
|-------------|---------|-----------------------|
| 時間 | コース名 | (講師名) |
| 午後1:00~2:30 | 親鸞を読む | (大阪大学大学院文学研究科教授 平 雅行) |
| 午後3:00~4:30 | 上田秋成を読む | (大阪大学大学院文学研究科教授 飯倉洋一) |

・ 梅田会場(新阪急ビル)

- 第1回:7/21(土) 学びなおす漢字と漢文(大阪府立大学人間社会学部教授 大形 徹)
 1 限目:「右と左はなぜ書き方が異なるのか - 甲骨文からさぐる」 2 限目:「扶桑と十日神話」
 第2回:7/28(土) 学びなおす漢字と漢文(四天王寺国際仏教大学人文社会学部助教授 矢野野隆男)
 1 限目:『論語』の解釈 - 注釈を中心に 2 限目:『論語』の解釈 - 物語から見て

会場地図



受講料

	コース	受講料(一般)	受講料(会員)	備考
基本	全8回分	16,000円	10,000円	・受講料は半期単位での納入も可能 別途年会費 3,000円必要
集中	全3回分	4,000円	3,600円	
	全2回分	3,000円	2,700円	・1回のみ受講も可能 (いずれのコースも1回 2,000円)

問合せ先:(財)懐徳堂記念会事務局 〒560-8532 豊中市待兼山町1-5(大阪大学文学部内)

TEL 06-6843-4830(直通) FAX 06-6843-4850

E-mail kaitokudo@let.osaka-u.ac.jp URL http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitokudo/

「都市も、教育も、絵も、人が原点」(前編)

名誉教授

大久保 昌 一

「日本の住宅づくりには血が通っていない」とおっしゃる大久保名誉教授。専門は都市行政。工学部助教授から法学部教授・法学部長と転じた“変わり種教授”としても有名。

気晴らしに描く水彩画は、趣味の域を越えて個展を開くほどの腕前。まちづくりも教育もそして絵も共通するのは、人への思いやりと自然を大切にすること。その熱い思いをお話いただきました。

子ども頃のお話から伺います。

“文化果つところ”(三重県北牟婁郡)で生まれ、中学まで過ごしました。小学校のときは喧嘩が一番でいわゆる番長的存在でした。しきたりや社会的慣習の枠にはまらなかった。価値観やものの考え方が人とは少し違っていたように思いますね。

これまでどんなお仕事を。

そんな自然環境で育ったこともあって、高校、大学(阪大工学部)で建築を学び、卒業して10年余り日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)に勤めていました。そこでニュータウンのマスタープラン作りに参加しました。当時東洋一のニュータウンと言われた、香里団地、千里ニュータウン、平城ニュータウン、京阪奈学研都市の計画に携わりました。のちの話ですが、大阪大学では、吹田キャンパスのマスタープラン作りに参加しました。

大学に移られたきっかけは。

行政(役所)がつくる住居、まちというのは、画一的で



ロンドン「フォーラム・ホテルの前庭」(1991)
この前庭は、地域のアメニティに貢献していると言うことで表彰されている。



大久保名誉教授(箕面市の自宅にて)

しかも中央集権的な発想です。ウサギ小屋と揶揄されるゆえんです。住む人間の立場から考えてつくっていない。

僕が考えるまちや住まいには、人が楽しくのびのびと生活できるための人間的な過程を重視したアメニティーがまず必要です。僕はいつも“住宅は人権の基本である”とっております。根本的な都市行政を訴えなあかんと思っていたときに阪大工学部に環境工学科ができることになり、仕事を変えました。

反応はありましたか。

大阪市や吹田市はじめ方々で言いつづけているけど、あんまり変わらん(笑)。

先生の考えるまちづくり、住まいづくりをもう少し具体的に。

都市計画には、科学的過程(役人が図面を描き、その図面に従って建物を建てる)、人間的過程(人権や人格を尊重し快適に自由に楽しく生活する)、政治的過程(住んでいる人が自ら考え、施策や計画づくりに参画する)の三つ

があるのですが、後の二つが無視されています。都市政策は、土地政策、住宅政策、公共事業政策からなりますが、我が国の土地政策は無策というか逆の政策です。住宅政策も極めて貧困、公共事業政策は産業インフラ中心で、生活インフラが軽視されているんです。

住む人も意識を変える必要があるのでは。

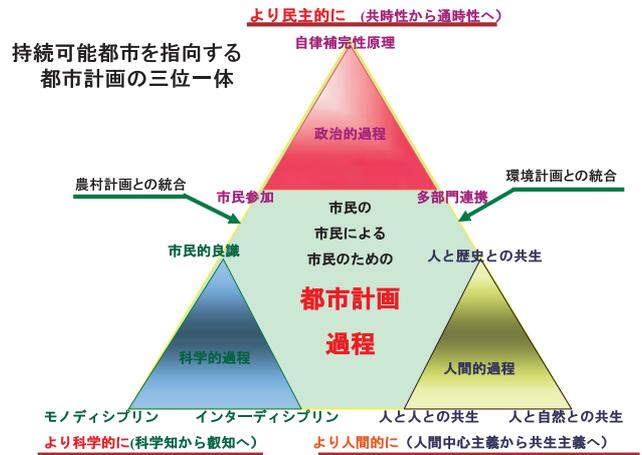
地元を大事にする、地域社会に感謝する気持ちが必要。欧米では、自分たちのまちを住み良くしたいという人たちがたくさんいる。現にピッツバーグなんかは製鉄産業で煤けたまちを市民運動で自然環境を取り戻し見違えるようなまちになった。子や孫の代まで考えて、いかに自然と調和した環境づくりをするか真剣に考えている。



ピッツバーグにて (1989)



豊中キャンパスにて (2007)



大学も地域に貢献する精神が必要ですね。

法学部当時、山村雄一総長に「大学は立地している地域社会に感謝し、恩返しをしなければならない」と言いました。まだ中之島にもキャンパスがありましたから、大阪府知事をはじめ、大阪市、豊中市、吹田市などの市長さん達とどんどん交流を深めるように山村総長にお願いしたんです。

「大学の使命は、もちろん研究・教育の向上を図ること。特に研究成果を社会に還元する、地域のニーズに応えることが、すなわち日本への貢献に繋がるんだ」と。この「社会奉仕の精神」が、地域益が国益に繋がり、人類益に繋がるんです。

それと大阪大学も様々な長期的なビジョンを持つ必要性があることを進言しました。山村総長はさっそく「長期計画委員会」という委員会を作ったんです。同時にこの千里、北摂地域をバイオの拠点にしたらどうかと提言し、モノレールの延伸についても大阪府に陳情に行きました。今それが実現しています。

(以下次号に続く。)

<コメント>

3時間を超えるインタビューとなりました。学生に教えるようにホワイトボードを使って説明される姿にこちらも圧倒されました。豪快な大久保先生は健在でした。

おおくぼ・まさかず

プロフィール

大正15年三重県生まれ。昭和28年大阪大学工学部構築工学科卒業。日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)職員を経て、昭和44年6月大阪大学工学部助教授、昭和51年4月法学部教授、昭和60年4月法学部長、平成2年4月大阪大学名誉教授。(財)大阪地域振興調査会会長、(社)大阪問題総合研究所理事長、豊中市政研究所理事長等を歴任、平成14年日本都市計画学会功績賞、平成15年日本計画行政学会論説賞等受賞、平成17年瑞宝中綬章受章

パリ、エコール・ポリテクニークへの短期留学

～ 大阪大学学生海外短期研究留学助成を受けて～

工学研究科博士後期課程 中 堤 基 彰



平成 18 年 10 月 1 日から 12 月 26 日までの間約 3ヶ月間、パリ郊外のエコール・ポリテクニーク (Ecole Polytechnique) において、大阪大学学生海外短期研究留学助成制度による短期留学の機会をいただきました。

現地で行なった研究活動、現地学生や研究者との交流などを報告させていただきます。

エコール・ポリテクニーク

エコール・ポリテクニークは理工系における世界のトップ校で、グランゼコール (フランス独自の高等専門教育機関) の一つです。アンペール、ポアソン、ナビエなどたくさんの著名な数物理学者を出している学校としても知られています。あのカルロス・ゴーンもこの大学の卒業生です。少数精鋭方式のため学生数はそれほど多くなく、土地や



建物もそれほど大きくありません。阪大とは大分雰囲気の違いがありました。今回私は、このエコール・ポリテクニークへ 3ヶ月間の短期留学をしました。そして大学内に設置されている超高強度レーザー応用研究所 (LULI : Laboratoire pour l'Utilisation des Lasers Intenses: 以下 LULI) において、私の博士課程のテーマである「超高強度レーザーとプラズマとの相互作用とその応用」に関する研究を現地の教授や学生らと共に行いました。



エコール・ポリテクニーク

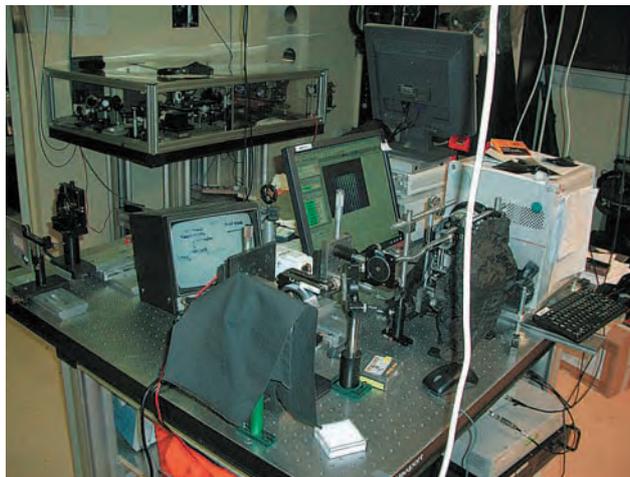
共同研究

LULI には世界有数の強度を持つレーザーシステムがあります。今回私はそのレーザーを用いて研究を行いました。ここで用いたような高強度のレーザーは固体物質を一瞬で破壊するようなパワーを持っており、例えば固体金属などにレーザーを照射すると、ピコ秒（ピコは一兆分の一）程度に金属中分子の電子やイオン間の結合が壊され、同時にメガ電子ボルト（メガは百万）以上の高いエネルギーを持つ電子やイオンが発生します。このような高いエネルギーを持つ粒子は、がん治療などの医療応用やPET（陽電子放出断層撮影）、未来のエネルギーとして期待される核融合、材料物性、宇宙物理など多岐に渡る応用が期待されています。

共同実験は10人ほどのメンバーで行いました。フランス人のほかにイタリア、アメリカ、ポルトガル、セルビアなど世界各国からの学生や研究者が集まりました。毎朝9時頃、皆が実験室にぼつぼつと集まり始めます。そこで今日はどういう風に進めていくかを皆で簡単に議論し、作業に入ります。議論は英語とフランス語を入り交えて行なわれました。私もここでは積極的にアイデアや意見を言っていました。私の場合はフランス語がほとんどわからなかったため英語でコミュニケーションを取りましたが、イタリアやポルトガルからの学生や研究者はほとんどがフランス語を使いこなしていました。もともと彼らの母国語とフランス語とが似ているので覚えるのもそれほど難しくないうえです。



実験風景（イタリア人の学生がモニターを見ながらターゲットの位置あわせをしています）



今回私が担当した計測器の一つ

実験の最初の2週間ほどは、実験装置の立ち上げに費やしました。光を使った実験ですので、レンズやミラーをはじめとする光学系を所定の位置に設置していくことが主な作業です。この作業をアライメントと呼んでいます。アライメントはミクロン単位の位置精度が求められますので、なかなか精神的にも骨が折れる作業です。また「ターゲット」と呼ばれるレーザーを照射する「的」の作成にも携わりました。大きさ1ミリ以下のターゲットを顕微鏡を見ながら組み立てていきます。これも精神的に疲れる作業です。今回の実験では10くらいの計測装置を用いました。レーザーを金属固体などに照射したときに発生する光やX線を観測し、固体中で何が起きているのかを調べる材料とします。実験参加者全員で計測器を順に一つずつ立ち上げていき、問題が起きたときはその場で皆で解決を図りました。そういったやりとりを通して学生は研究者から知識を得ていくことができます。私もこのようなやりとりを通して3ヶ月間で得た知識は少なくないものとなりました。そして無事、かなりの量の実験データを取得することができ、今もその解析に追われています。

昼食は皆で学食に行きました。フランス人は食事の時間を大切にするといいますが、研究者も同じで、昼休みはたっぷり1~2時間、会話をしながら食事を取り、食後は皆でエスプレッソコーヒーを飲んでリラックスする時間をきちんと取ります。しかしその後仕事に戻ると高い集中力で夜までしっかり働きます。フランス人はあまり働かない、などと聞きますが、我々の実験は毎晩22時から遅いとき

は午前0時過ぎまで続きました。途中20時頃研究室にある小さなキッチンを使って皆の夕飯を作ります。大抵はイタリア人の学生がパスタを作るのですが、私も何日かは担当し、すき焼きやザルそばなどを皆に作りました。すき焼きは豆腐や日本酒、椎茸など材料が無かったので苦労しましたが、あるもので何とかしました（日本酒 白ワイン、椎茸 マッシュルームなどで代用）。評判も上々でした。ただ生卵に関しては皆いぶかしげな顔をしていました。向こうの人は生卵を食べる習慣がないそうです。

一日を通して外国語で会話していると、日本語が恋しくなるのか、毎晩寝る前には日本から持ち込んだ文庫本を読む癖が付きまして。自分が持ち込んだ分はすぐに読みきってしまい、パリで何冊か日本の文庫本を買い足しました。またやはりコミュニケーションが外国語というのは精神的に疲れるようで、睡眠時間が日本にいたよりも1~2時間増えました。そして週末も土曜日は昼くらいまでベッドを抜け出せず、起きたあと頭がボーっとして一日つぶすことが多かったです。日曜はパリに観光に行ったりしましたが、実験以外にも執筆中の論文をまとめたりとフランス滞在中に終わらせるべき仕事をいくつか抱えていたので、半分くらいは研究室で一人仕事をしていた気がします。

人々との交流

滞在中、良い人脈を作ることもできました。最も仲良くなったのはミラノ大学からやってきていた同年代のイタリア人の友達でした。非常に陽気で、自分の意見をはっきり



お世話になった受け入れ研究者に招待されたホームパーティ

と言う人でした。毎晩、実験が終わったあと、ホテルの部屋でワインを飲んだりしながら、くだらない話からまじめな話までいろいろと会話しました。お互いの考え方や国の文化、お互いの将来の進む道なども語り合いました。同じく同年代のフランス人学生の家（学生寮みたいなもの）にも招待されました。そのときは7~8人でホームパーティをしました。チーズをつまみに、ワインやベルギービールで乾杯しました。このように飲みながらいろいろと語り合うのは日本もヨーロッパも同じだなと感じましたが、話す内容については少し驚きもありました。というのは、こちらの学生は酒を飲みながらも政治や宗教の話、また国の文化の話などを好んですることです。私だけがヨーロッパ以外の出身だったので、宗教観や国の政治についてもいろいろと聞かれました。またフランス人は日本に友好的なイメージを持っている人が多いらしく、日本の文化をかなり詳しく知っている学生にも何人か出会いました。

別の日には今回お世話になった受け入れ研究者の方の家で夕食に招待されました。彼はパリ市内のアパートに奥さんと2人暮らしてました。食事は全て彼が作り、奥さんはテーブルで皆と歓談していました。日本とは逆のこの状況に興味を持ったので聞いてみると、フランスでは女性の8割が仕事をしているため、家事も男女が平等に分け合うのが当然だそうです。この家では旦那さんが料理がうまいという理由で大抵は旦那さんが食事を担当するそうです。女性の社会進出という意味では、今回滞在した研究所でも女性の比率が日本に比べると明らかに高く、3人に1人は女性でした。また、研究所内の方同士で結婚される方も多いようで、子供を持ちながら夫婦同じ研究所で働いているといった方にも何人か出会いました。

観光・その他

3ヶ月間の滞在中、週末にはそれなりに観光を楽しむこともできました。パリは思っていたよりも小さな町で、感覚としては京都と同じくらいでしょうか。地下鉄を乗りこなせれば観光名所は基本的に網羅できます。パリはご存知の通り観光名所が数多くあり、しかもそれぞれがとても近い距離にあるので観光にはとても便利です。ルーブル美術館の広さと展示数の大きさは想像を軽く越えるものでした。



パリ市内、サン・ジェルマン地区
(クリスマス時期にだけ並ぶ小さな店。服やチョコ、キャンドルなど
いろんなものが売っていました。クリスマス気分を存分に感じることが
できました。)

一週間かけても全部見切るのは無理だと感じました。話によると、それでもルーブル美術館の地下にはスペースの都合で展示されていない美術品が山ほどあるそうです。またパリは特に目的がなくても散歩しているだけで楽しい街です。リュクサンブール公園では週末は子供連れの家族でいっぱいでした。個人的にはマレ地区が気に入りました。雰囲気の良い小さな公園がたくさんあり、カフェもたくさんあります。またショッピングにも都合が良く、食器や衣服、



パリのリュクサンブール公園
(正面は公園内にあるリュクサンブール宮)

チョコレートなどを売る小さな店が密集しています。ご存知の通りパリではおいしいものがあふれており、生カキ、カモ料理などに舌鼓を打つこともできました。チーズフォンデュもなかなかでした。またパリにはベトナムからの移民が多いので、ベトナム料理も非常においしかったです。値段も安いので、学生にはオススメです。

最後に

3ヶ月の滞在中、自分の研究を大きく進展できただけでなく、海外の研究者や学生との交流を通して文化の違いについても多くのことを学ぶことができました。同時に、このような素晴らしい機会を与えてくださった大阪大学(学生海外短期研究留学助成制度)に強く感謝しております。



一緒に実験した方々と

なかつつみ・もとあき

大阪大学大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻 博士後期課程2年。
超高強度レーザーとプラズマとの相互作用、プラズマによる光・高エネルギー粒子制御デバイスの開発を行なっている。

プロフィール

生物研究会

生き物の魅力に惹かれて

生物研究会は、いろんな生き物を対象に、好奇心旺盛に観察します。虫取り網や双眼鏡、カメラを背負い、山や川へ出かけ、昆虫採集や魚とり、鳥、植物の観察をします。

近くでは箕面、妙見山、夏の長期休暇には遠く、電車や船でいくつもの県を越え、海、森へと出かけます。この場所でしか見られない生き物が数多くいることを実感させられます。どんな珍しい生き物を見つけられるかは運次第。また、求める昆虫をうまくとらえるにも、多くの技や知恵が必要です。

大学も色々な生き物でにぎわい、私たちを楽しませてくれます。豊中キャンパス、待兼山の朝は、シジュウカラやヤマガラ、エナガなどが元気にさえずり、よく観察しているとコゲラという小さいキツツキの一種も見つけることができます。また、稀にしかみられない昆虫もあり、待兼山の環境の貴重さがうかがえます。

秋の学祭「まちかね祭」では毎年、飼育している鳥や魚、部員の採集した、部屋をうめつくすほどの昆虫標本を展示します。見学に来た子どもたちは、恐る恐ると興味が入り交じった様子で見入っています。

約40年も昔から続く、我々の活動を記録した部誌「Noctiluca（ノクチルカ）」近年少し途絶えていましたが、再び書き始め、現在新しい3部目を製作しているところです。



植物を見に行った伊吹山での様子



シジュウカラ(左)とモモフトカミキリモドキ(右) [豊中キャンパス]

ノクチルカは夜光虫と呼ばれる光る植物プランクトン。名前の由来は初期の先輩が夜の白浜にて、夜光虫の幻想的な光景に心をうたれたことによります。

活動を通して、色々な所で自分達の手で自然とふれあう、季節ごとの生き物の息吹を感じる。何とも言えない楽しさがあり、生き物について考える機会を与られます。

部長 柳田 陽子(理・3年)

コメント

多種多様な生き物。じっくり見つめれば、誰でもその興味をもっと広げることができます。



活動場所：明道館(豊中キャンパス)

活動時間：平日の昼、放課後や、休日。基本的にいつでも自由に活動します。

部員数：女性3人、男性13人

連絡先：proton.ed@mac.com(柳田)

編集後記

平成19年がスタートして2ヶ月。今年は、10月の大阪外国語大学との「統合」で大きく変わる年になります。統合については前号(1月号)にてその概略を紹介いたしましたが、新たに展開される取り組み等の内容についてより詳しく、今月号から「役員室だより」にて連載で紹介していくこととなりました。

また、今月号は、「統合」「融合」「連携」など複数のものが何らかの形でまとまっていくことに関する記事が多い号となっています。特に「連携」については、ナウススペシャルだけでなく、JICAとの連携協力協定や、石橋商店街の皆さんと連携して行われた「系びす男選び@阪大坂」など、様々な記事が掲載されています。まわりとの様々な結びつきが強まっていく中、これらが今後の大学の大きな力になっていくと思います。(瀬尾)

学会館東京連絡事務所の利用

本学教職員が、東京に出張した際に利用できるオフィスが「学会館」内に開設されています。

事務所内には、応接セットを始め、PC、プリンターのOA機器やプラズマTV、コピー、FAX、携帯電話なども設置されており、本学の東京出張所として利用できます。

ご利用は下記にお問い合わせ下さい。

住所：東京都千代田区神田錦町3 - 28

電話：03 - 3292 - 5936

利用時間：9時～21時

休業日：学会館の休業日

(8月13日～17日、12月30日～1月3日)

HP <http://www.gakushikaikan.co.jp/>

照会・申込先：総務部総務課総務係 06 - 6879 - 7014



学会館 HP から転載

ホスピタルローソン(ローソン阪大病院店)オープン!

医学部附属病院に2月1日、ホスピタルローソンがオープンしました。

同店は、これまで院内1階にあった恵濟団売店を病院アメニティ・ホスピタリティの向上の一環として改修し、ATMの設置、24時間営業などの利用者にとって便利なサービスが提供されます。



交流協定大学紹介

国立成功大学(台湾)

National Cheng Kung University



キャンパス内の成功湖から大学の建物を望む

国立成功大学は、台湾の南部、温暖な気候の台南市にあり、「北は台大、南は成大」と言われるように、台湾を代表する研究型大学です。その歴史は古く、1931年に現在の成功大学の先駆けとなる台南高等工業学校が設立され、1971年に現在の国立成功大学となりました。同大学の名称は台湾建国の父である鄭成功の名に因んだものです。

現在、教職員数4,329名、学部生9,865名、大学院生8,425名を擁し、伝統の強みか理工系を中心とした10の学部があります。2005年10月、台湾教育省が推進する5ヵ年計画

「Program for Promoting Academic Excellence of Universities」の対象12大学の一つに選ばれ、国立台湾大学に次いで2番目に大きい政府資金援助を5年間獲得することが決まっています。国立成功大学はこれをもとに、教育・研究環境の一層の整備と国際化を進める予定です。学内改組の動きもあり、生命科学系が理学部から独立して、医学部その他を含めた生物科学バイオテクノロジー学部という大きな組織に統合されました。

約10年前から、本学の工学部、理学部、経済学部が順次、同大学との継続的な研究教育交流活動を開始し、交流の基礎を築いてきました。各学部間での学术交流協定を発展させ、昨年11月に大学間学术交流協定の締結に至りました。これからは学生交流も含めて教育研究面でのより活発な学术交流が期待できます。

所在地：台湾台南市大學路1

<http://www.ncku.edu.tw/>



広大なキャンパスには樹齢100年を超える大樹が何本もあり、木陰が学生や教員にとっての憩いの場となっています。

阪大NOW No.95 2007 2月号

2007年2月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1

TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7166

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp